II-3F-67

318
50

# 唯心禪話

318
50

原僧運師述

# 唯心禪話

東京

通俗佛教館發行

# 例言

一　本書の著者、舜應僧運老師は臨濟門下の尊宿にして、本年六十六歳の高齢なりしが、多年通俗佛教新聞の愛讀者にして、主任墻外道人の宗説文の三通に於て逍遙自在なることを認識せられしものと見ゐ道人は曹洞門下の出身なるにも拘らず、遠く書を道人の座右に寄せて訂正出版のことを謀られしは、明治三十四年八月六日のことなりき爾來數回の信書を往復し、遂に双方の意思融會して、通俗佛教新聞紙上に連載せらるゝことゝなれり、されは同紙第三百七十五號より第四百十七號に跨り殆と一年間の星霜を經歴し、十五回にて完了するを得たり

一　本書訂正出版の事たる容易の業に屬すれども、著者は未だ廣く世人の爲に其名を知られざるが故、折角出版するも其販路如何を慮

り、且つ著者が宗我見あきに隨喜し、貴重なる時間を以て、懇切に文字の取捨を爲し、狹隘なる紙面を割いて禪話の正味を紹介せられしは他日出版の時、販路の博くして、著者が熱誠の貫徹せんことを謀りてなり

一　道人の具眼なる、運筆の流廉なる、著者の厚意を損せざるのみならず、文章を潤色して、倍々禪海の妙味を發揮せられしもの尠少ならざるを見る、著者の眞意たる、前記の如く之を一小冊子と爲して、博く社會に流通せんとのことなりしも、道人は初めより豫め此旨を告知せず、竊に天下の輿望を待ちつゝありしに、果せる哉、往々完結の上は一小冊子に纒めて禪學者の指南に供せられたしと望む人多數ある中にも、横濱市に於ける篤信の優婆塞某氏は殊に深く歡迎の意を表せられ、自から書を寄せて若し出版にもなることあれば、印刷費の幾分を補助するに由り、成る可く安價にして一人も多くの人々に看讀せ



しめんことを要せられしか、新聞掲載の完了するや、直に印刷費の多分を醵出して一日も出版の早からんことを迫まられたり、外護心の厚き感ずるに餘りあり、是に於て乎、輙ち印刷に附する事とせり

一　前記の如く、印刷費の内へ淨財を喜捨せられたるに由り、本書は他の賣本に比して正價の低廉なること無類なり、凡そ佛書を出版するは固より名利の爲に非ずして上求菩提下化衆生の爲なれども、兎角佛敎界の書籍は、世間普通の書籍に比して其販路狹隘なるが故、勢ひ代價の高直なるを免かれざるは遺憾の至りなりとす、故に資産ある篤信家は、佛敎外護の爲め、淨財を喜捨し、成る可く代價を低廉にして販路の區域を擴張せざるべからざるものか、本書は即ち此遺憾あからしめたり

一　四料揀講話は墻外道人曾て横濱市ある佛敎の篤信者、酒井芳兵衛氏の宅に於て、信男信女の爲に講話せし腹案をば、更に之を敷衍して

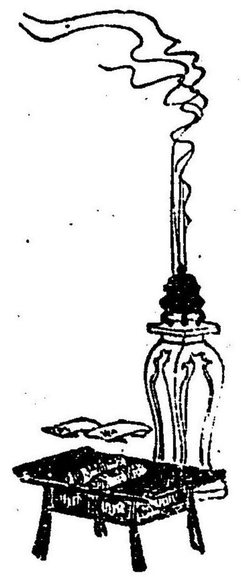
通俗佛教新聞第參百七號以下に連載せしものにて、是れ眞に禪海の好指針ともいふべき有益の文字禪なれば、本書の附錄として、博く流通を謀ることゝせり、殊に此の四料揀は臨濟大師の垂示を通俗平易に書き伸べたるものにて、臨濟門下の老宿なる原師の手に成りたる本書の附錄とするは、頗る妙あらん、仍て臨洞二門の禪味を打して禪海の一味と爲したるのみ

一　本書の草稿は本「唯心一夜談」と名けられたるものなりしが、佛教新聞に掲載せらるゝことゝなるに及で「唯心夜話」と改題せられたり、今亦その夜話と講話とを併せ編輯して出版する事となりたれば、更に標題を撰擇して「唯心禪話」と命じたり、讀者焉を諒せよ

一　著者原僧運老師は神奈川縣相模國高座郡新磯村臨濟宗建長寺末常福寺の現住職たり、師の禪室には更に幾般の草稿ありといふ、望むらくは本書の如く、庵内を出て、庵外幾多の初心晩學を益せられんことを時に

明治三十五年壬寅八月二十五日佛教館の北窓下に於て

編者　月川敬識





# 唯心禪話目次


序言……一
第一　佛教は信より入るべき事……七
第二　神變は眞道に非ざる事……一三
第三　異を顯はし衆を惑はす可からざる事……二一
第四　萬法は唯心の所現なる事……二九
第五　無常を觀じて常寂に入る事……三六
第六　上帝と彌陀とは天地懸隔の事……三九
第七　佛教と外道哲學との比較……四三
第八　無明の實性即佛性の事……四八
第九　人生の一大事……五三
第十　疑團は參禪の初步……五八

第十一　實參實究の事……六四
第十二　禪學問答一則……七〇
第十三　呂洞賓の一睡……八四
第十四　槐安國物語……八六
第十五　韓明が自及と貞成の生天……九〇
附　録
臨濟大師四料揀講話……墻外道人講述
序　言……一
第一　奪人不奪境……六
第二　奪境不奪人……一六
第三　人境兩俱奪……二八
第四　人境俱不奪……四八



# 唯心禪話

## 序言

原僧　運述

菴中一夜甚だ無事、四隣寂として聲なし、自から一室に兀坐するに胸宇廓落として心氣爽然たゝ、是に於て乎、菴外有爲轉變の事物、菴内眞俗二諦の法門、確爾として我が心鏡に映じ來る、此を思ひ彼を想ふに千樓萬感轉た競起して止めんとすれども止まらず、抑も人類の此世に處するや上は王公大臣より、下は田夫野人に至るまで、常に五欲六塵の境に纏縛せられて、寤寐進止にも其の勞苦を忘るゝこと無し、邂逅に愉快逸樂の事ありとも、是れ却て昏苦の因なるのみ、其の苦樂得失の如き、此れ是を幻夢中の幻夢なりと謂ふ、所謂彼の盧生呂洞賓等が、五十乃至八十年間の長夢の如し、又莊子夢に蝴蝶と化す、覺て後自から疑ふ、蝶と爲りし

者は即ち我なる歟我爲る者は即ち蝶なる歟と、之を徹見するときは、總て槐安國裡一場の幻夢たるに過ぎざりしを知るのみ、然るに此の幻夢を實有と認めて之が奴隷と爲るもの是を凡夫と謂ふ、此の幻夢に處して無礙自在なる、是を聖人と稱す、之を判するに造化教と唯心教との別あり、一は其の造化神を尊崇して自から奴爲る者、一は造化神を使役して自から主爲る者なり、知らず人情は斯れ其の何れを好むものなる乎心外に神ありとする者は是れ迷へるなり、萬法一心を出でずとする者は是れ悟れるなり、其の迷に淺深あり、其の悟に親疎あり、故に蓮華峯花主の曰く、古人這裏に到りて什麼とか爲す、肯て住まらずと、是れ即ち千聖も尚修行して未だ休せざるが故なり、即今現境の如きは則ち先業の所感なるのみ、蓋し悟は美眠の如く、迷は噩夢の如し、然れば迷悟元一にして一即ち迷悟なり、此一を窮むるに無漏無爲無形無際の法なり、澆季の人情は浮薄に流れ過ぎて斷見空見の輩、紛々として出るを見る、其の輩論じて曰く、人死する則人は其の精神共に身體の諸原質と分離消散す何ぞ因果應報の理、天堂地獄の相あらんやと、敢て佛教を信せざるのみならず又曾て基教をも省みざるなり、故に親眷中縱令九死一生の急及び不幸服喪の事あるも談笑して常の如し、更に慟哭涕泣の聲を聞くことあらず、洋人之を評して無宗教者と爲すも亦免かれざる所なり、滔辨彬文の如きに至りては、古賢三舍を辟くと雖も、悲む可し道の本源を知る者は猶希なるが如し、故に因果を撥無して終に薄愛無情に墮す斯稿の成る所以亦此等の衆生を憐むに由る、然りと雖も婆心の禁ずる能はざるものあれば、序次複雜にして配列正しからず、讀者其の不文を尤めずして、義趣のある所を采らば、予の歡喜何物か之に加へん

## 注意一則

此に豫め注意を促し置かんとするは、是より語、話せんとする老野が談片たり、老野の談片は固より面白こともなければ可笑ことも

面白こともなく、可笑こともなければ、聞て居る内に何時ともなく、睡氣がさしたり、欠氣が出たりする樣になるは必然のことなり、されど面白ことや可笑ことは世上に於ける有爲轉變の事にて、我が已躬下の一大事にはあらざるぞかし、有無轉變の世事に奔走して、難受の人身を夢幻空華の中に終るを可憐の衆生といふ、可憐の衆生は佛法の何物たることを知らざるがゆゑ聽聞の必要を感せざるなり、その必要を感せざるは、畢竟己躬下の一大事たることを知らざるに由る、今之を譬へんに、その親たる者が、我子の九死一生といふ大患に罹りし時、醫師に診察して貰ひ、その容体を聞く時の心持はソモ如何、是れ決して他人の事にあらざるがゆゑ、必ずや虛心平氣耳を傾けて眞面目に聞くならん、法を聞くこと亦斯くの如くならば、無限の妙味と無限の愉快を感するに至るや必然たり、今我々お互に無明煩惱の大患に罹り居る可憐の衆生あるがゆゑ、一歩錯れば當面に蹉過して人身の機要を失し、三惡趣にも墮落せんとする一刹那たらさらんや、然るに僧侶の話しは僧侶の得手勝手とのみ思ひて、之を聞かんとする者の稀なるは誠に遺憾の至りに堪へず彼の徒謂へらく、宗教者の話しは我等の如き商人百姓等には聞くの要なしと、是れ然らず、身は縱令商人たり百姓たり、官吏軍人たりとも木偶人にはあらず、何人も此身の主宰たる心靈を具せざるなし、心靈を具するからには、誰か靈界の談話を不必要なりとせんや、若し之を不必要なりとせんか、是れ木偶人に異ならざるなり、已に木偶人に同じからすとせば、其身分其職掌の如何を問はす、宗教上靈界の談話は虛心平氣にして聽聞を怠るべからさるなり

天下誰か百千年の齡を保つ者やあらん、此五尺の身躰は地水火風の假りに和合せし化物にあらずや、此の化物の中に包まれてある心靈其物は此身の主人公にして、また天地萬物の主宰たり、その主人たり主宰たる心靈の何物たることを探索し、且ツ之を自知自得する話しなるがゆ

る、之を唯心禪話と名くるなり、故に十方の智者は能々眞面目になつて傾聽せられんことを希ふ、古人云く「有物先天地、無形本寂寥、能爲萬象主、不逐四時凋」と、此物とは所謂心靈に非ずして何ぞや、又曰く「撲落非他物、縱横不是塵、山河并大地、全露法王身」と、此法王身といふも亦是れ心靈なり、又曰く「若人識得心、大地無寸土」と、是れ三界唯心、心外無別法の宗旨にあらすといふことなし、此の心靈は天地に先じ、萬象の主となるものなれば、天地萬象其儘唯心の所現にあらざるはなし、天地には始終あり、萬物には生滅ありと雖も、此の唯心は不生不滅不增不減にして變易あることなし、此の唯心を自得するにあらされば安心立命を得たりと許しがたし、語を寄す諸人、眞箇の安心を得んとならは、世に種々の宗教ありと雖も、單刀直入此の唯心教に來れ、若し心外に別法ありと執するものは是れ邪教なり是れ魔法なり、何ぞ安心解脫の法と言はん、諸士之を思へ

# 第一　佛教は信より入るべき事

諸人等も此五体は全く四大の化物にして、追付元の四大に歸らざるはなし實に我身の脆きことは電光朝露の如し、唯暫く四大を假りて此身の此に顯はれ來ること、譬へは風前の孤燈に似たり、今日は存すと雖も明日の事は測り知るべからず、凡そ此世界中には十五億以上の人あり、一日に死する者は九萬三千餘人にして、一時間に死する者は五千五百人の平均なりといへり、されば我も各々方も其内の一人なるがゆゑ時々刻々、刹那刹那に出る息は再び還らず、見す〳〵老少共に黄泉の路に近付ばかりなり、古歌に曰く○老の坂登り〳〵て跡みれば、急がぬ道にさきの近さよ」と、夫れ實に是の如く、纔に此線香一本燃る其間に、線香の厚みある黄金を積て過ぎつる時間を購求せんとするも却々に得べからず、故に他人の事とのみ思ふべからず、我身も必ず一度は死せざる

べからず、唯少し早きと遅きとの差はあれど、無常の殺鬼に呑まれざるは一人もあるなし、古人曰く「百計千方只爲身、不知身是塚中塵、莫謂白髮無言語、此是黄泉傳語人」と誠に夫れ此身は塚中一堆の塵土と化し去るものなるにも拘らず只妄りに此身を愛執するが爲め、百計千方、或は人面獸心の行ひをも爲しかねざるを見る、噫、愚なる哉鈍なる哉、然りと雖も此身の善惡業は永く消滅せずして未來永劫に及ぶを奈何せん、故に必あらん者は隨分正直正路の心を持ちて來生の善種を蒔置き、假りにも三途の惡種を蒔給ふことなかれ、諸人は此身を如何に思へるや、此身は全く過去世に於る善惡業種の生しなり、智慧や才覺を以て成りしものにはあらず、如何となれは熟々人類社會の狀態を鑑みたまへよ、利發の人にも貴者あり、愚昧の者にも富者あり、例へば伯叔の賢にして餓死するあり、跼蹐の兒にして長命なるあり、皆是因果應報の實理にして枉ぐべからざるものたり、然れども人多くは此の因果を疑うて其實なき



ものありとす、惑ひのいと深き憐むべきのみ、因果は是れ眼前の理、何ぞ疑ふに及ばん、請ふ之を近きに見よ、昨日は過去なり、今日は現在、明日は未來ならずや、昨日恩惠を施すときは、今日其報謝を受け、今日他人の物を盗むときは明日捕縛に就く、善惡因果は歴然たり、是の如く久遠の過去より展轉して、轆轤の如く流水の如く、暫くも停まることなく、生れ替り死に替り、喰ひつ嚙れつ三界二十五有に彷徨しつゝありしに、如何なる僥倖ぞや、お互に今日是の如く人間界には浮び來りぬ、此の人間界は固より三界の火宅に相違なけれど、苦樂相半して其兩端に走らざるがゆゑ、善と惡とを聞き分るの靈智を具せり、故に諸佛賢聖は多く此の人界に出現して善惡因果の道理を說きたまへり

於戲、實に此の人界は六道の追分あり、善と惡との一念力によりて昇天墮落の方向は定まりぬ、實に六道の追分なるのみならず、四聖の又追分たり一念力の差配によりて、或は二乘地に向ふあり、或は菩薩佛乘に向

ふあり六凡に往返し、四聖に遊化すること、皆一念心上の安排に由れり流轉生死の間に於て南閻浮の人身を受ることは、恰も盲龜浮木の如し古德示して曰く、此身今生に向つて度せずんば、更に何れの生をか待たん」と、眞に然り、お互は今死して又何れの方面に向ふらん、夢幻空華の此身は四苦八苦の演劇たり、此の一幕の終りて跡はまた如何なる幕にか替るらん、人の一生は電光石火の如し、我や先人や先今日とも知らず、明日とも知れぬ此身は、風前の燈火、草葉の朝露よりも尙ほ危し朝露は消え殘りてもありぬべし、誰か此世に殘り果つべき』永平祖師示して曰く無常憑み難し、知らず露命いかある道の草にか落ちん、身已に私に非ず命は光陰に移されて暫くも停め難し、紅顏いづくへか去りにし、尋ねんとするに蹤跡なしと、朝の紅顏、夕の白骨、貴賤何ぞ擇ぶべき、老少何ぞ分たん、又示して曰く、無常忽ちに到るときは、國王大臣親暱從僕妻子珍寶たすくる無し、唯獨り黃泉に趣くのみあり、已れに隨ひ行くは只是れ善惡業等のみなりと、蓮如上人も亦示して曰く、

夫れ惟れば、人間はたゝ電光朝露の夢幻の樂ぞかし、たとひまた榮華榮耀に耽りてたもふさまのことなりと云ふとも、それはだゝ五十年乃至百年のうちのことなり、若し只今も無常の風來りて誘ひなば如何なる病苦に遇ひてか空しくなりなんや、まことに死せんときはかねて頼みおきつる妻子も財寶も、我身には一つも相そふことあるべからず、されば死出の山路の末、三途の大河をば、唯一人こそ行きなんすれ、之に由りて唯深く願ふべきは後生なり

と、誠に的實の敎訓なり、大集經に曰く「妻子珍寶及王位　臨命終時不隨者」と、憐ふも亦迂濶なり、久遠實成の阿彌陀佛は不生不滅にして常寂光土に在しませり、至心に信樂して無量壽佛の名號を稱ふべし、口に念佛稱名を爲せども、其意處々に散亂せば、恰ながら竹筒に入りたる風聲の如くにして、何等の功德もあかるべし、又春の田に蛙の鳴くが如

く、只其聲のみを聞くのみ、何の得る所やある、故に念佛行者は一心一向に念佛申すべきものなり、一心一向とは純一無雜なり、純一とは交らざるなり、交らざるとは思慮分別の色々の交らざることなり、その交らざるを清白梵行の念佛三昧とは云ふなり此正三昧に住すれば、菩提の妨げとなる煩惱も其儘菩提となり、生死の障りとなる妄想も其儘涅槃となりて、念々刹那に報土往生は疑ひあるべからず

但し往生とは誰人も此身死しての後、魂魄が獨り極樂へ往くものとのみ思ふは誤りなり、專修他力一念往生は釋尊の本意にして、彼の淨土門に於ても前念命終後念即生と教ふる所なり、觀無量壽經にも「如彈指頃往生彼國如一念頃即得往生」と說き玉ひ、阿彌陀經にも「心不顚倒即得往生」と說き、また「執持名號一心不亂」と說き玉へり、此の一心不亂は即ち三昧にして、三昧は即ち禪定なり、故に禪定と念佛とは異名同躰にして自他を別つ可らず、自他の差別を空じて絕對平等の三昧に入る時は、念々是れ悟道見性にして、念々是れ往生淨土なり、何ぞ自他を論じ遠近を問ふことやあらん、經文分明に「極樂世界去此不遠」とあるに非ずや、又長者論に曰く「無邊刹界、自他不隔、於毫端十世古今、始終不移、於當念」と、是れ唯心法界、法界唯心なるがゆゑ、十萬億土六十恒河沙の佛身も、我等五尺の小身も毫髮の差違あることなし、毫髮の差違なければ、此身心このまゝの活佛にして、無量壽佛とは三昧發得佛智現前の當人に名けたるものなりと知らずんばあらず、是の如くに信じ、是の如くに解するを得入と稱す、老僧の見所夫れ只是の如し、若し心外に佛を求め法を求むることあらば是れ迷ひなり、故に心外無別法、心佛衆生三無差別と說きたまへり



## 第二　神變は眞道に非ざる事

予文久の頃、美濃國に居りしが、その可兒郡邊には御嶽講社の信徒夥多

かりき、彼等が病人の爲に祈禱するを見るに、中座の人白弊を持ち、頻りに御嶽座王大權現なる覺明行者を念じ、晝にまれ、夜にまれ、丹精を凝して祈念すること凡そ三時間餘りに及ぶ(此の覺明といふはモト尾張の貧民なりしが、種々に困苦して通力を得たる人元和年中の頃なり)愈々祈念了らんとするに際して、彼の中座にある人の持つ白弊より、自然に水の湧出つること三四滴なり、之を利證の効驗として病者に飲ましめ平愈を祈れり

又木曾路藪原宿と奈良井宿との間に鳥居峠といへるあり、此峠に御嶽講社の遙拜處あり、彼の御嶽山を距ること直徑六里といへり、予は其頃雨を侵して此峠を越えたりしに、信徒二三十人、數珠を揉み九字を切り幷に隱語を唱へて祈念すること眞に切なりき、往來の旅人あども之を榜觀する者多かりき、其中の一人曰く、暫時にして御山現はれ出つるなりと、左もある事かなと不思議の感に打たれ、予も物數奇なり、雨の篠を亂すも顧みず、足を留めて之を熟視しけるに、軈て案の如く山の裾を見たりける是れ信徒が丹精を凝し、心を山にして祈りけるが故、遂に山の半腹を露はしたるならん乎

又世に實生護摩なるものあり、火渡護摩あるものありて、熱湯をば忽ち冷水にする法ありと聞く、是れ皆信力の致す所なりとす

予は倩これを考ふるに、其行者の心、專ら白弊を持ちて水を求むるにあれば、其水凝り固まりて遂に此奇特を現はし、倍々人心を厭迫するの念に基くもの歟、又御嶽山を篠つく雨の中に現はすも亦行者の心專ら山を露はさんと欲して祈るが爲めなるのみ

又紙上に火を焚き劍の上に素足にて登るも、亦專ら心念を凝結するに依らざるはなし、彼れ行者の中心、多くは奇特を露はして人の心を硬くし信心をして倍々堅固ならしむるも、畢竟その行者は我見を摹りて惡業報を增すのみ、人生に於て何の得る所か是れあらん

異を顯はし衆を惑はすは眞道正法とするに足らずと釋尊は說き給へり、而して其の眞道とは何ぞや、曰く水鳥樹林念佛念法念僧是あり、人人具足する此の一念は萬法を具有す、久遠劫より盡未來に至るまで、不生不滅不增不減なり、增減なきが故に常樂我淨なり、此の四德波羅密に遊戲三昧を爲す之を眞の安心といふ、縱令奇特玄妙を以て人を誑惑するも、是れ唯だ一段の妖怪場裡にして、眞實安心立命の地位にあらず、我が安心立命とする所は、萬刼千生に涉りて變動なき圓明無相涅槃寂靜の地位を自知自得するに在り

所以如何となれば我身は全く四大の化物にして、此の五體は有爲轉變の假物なるに依りて、永く保持すべきものに非ざることをば之を自知する者なきに非ずと雖も、眞實に吾が眼光落地四大分離の時如何を自知する人稀なり、寔に愚なるにあらずや、凡そ斯の天地の間に於て最尊最上なるものは心なり、故に心のことを如意珠といふ、敎中には三界唯心と說き玉ふ如く心は天地の元祖にして萬象の根原なり、苟くも宗敎海裡の人にして此の唯心如意珠の大原理を明らめず、空しく生じて空しく死し、恰も枯木死灰の如きは、縱令萬物の靈長なりと自負すと雖も此身に於て何の益かある此の大原理を窮めて昉めて我が心の靈妙不可思議なるに通達するを眞の開發悟道といふ、抑々釋迦牟尼佛の一たび世に出現したまひてより佛の名甚だ大なり、佛とは覺者亦智者ともいへり、是れ即ち迷者に對する語なり、一切智、一切種智を具し、煩惱を離れ、一切法一切種相に於て能く自から開覺し、亦能く有情を開覺せしむ睡夢の覺るが如く蓮華の開くるが如く名けて是を佛と云ふなりと、依て余が淺見を以て佛の字義を和解するに、ホトケとはホドケルの義にて、物に縛られしものが和解せらるゝなり、即ち煩惱の爲に繫縛せられし者が菩提の智力によりて解脫せられし姿なり、

ほとけとは誰が結びしや白糸の賤女がをだまきくりかへし見よ之を

譬ふるに彼の赤子の初めて生るゝや、喜怒哀樂愛惡欲の情未だ發せざるときは、恰も木株より息の呼吸するが如きのみ、殆ど心無きに似たり、然れども日を增し月を經るに從ひ、乳を含て其の甘きを知り、隻手にして片方の乳房を摩するを覺え、夫より段々智惠付に隨て、眼耳鼻舌身意の六欲に染み、無繩自縛として我と我心に縛着せられ、本來解脱の身心に於て自由を得ざるに至る、之を凡夫といふ

うまれ兒が次第〳〵に智惠つきて佛にとほくなるぞかなしき

本來ほどけてをるものを、我と我が手にイナ我心に結びこめたるものは何物ぞ、是れたゞ一念最微の無明なるのみ、此の一念畢竟如何と體達すれば無明の實性本來空寂にして一物の得べきなし、此の不可得なる實性は直に是れ佛性の脫體現成なり、故に曰ふ、始知衆生本來成佛なりと、智者能く思量せよ、心佛衆生三無差別、一念迷へば佛となり、一念悟れば衆生となる生佛元來一心を離れざるが故に三無差別なりとの玉へり

心は工畫師の如く、世間種々の五蘊を造る、見る物聞く物、森羅萬象みな唯心の現成ならざるはなし、されば天地萬象の元氣凝結して此の活潑なる心性を具有すといふも其理あるを見て、諸の玄辨を窮め博學にして數千萬卷の書を讀まんよりも、寧ろ眞理の經驗を有するに如かず、況や大難事は心の窮理に過ぎたるはなし、聰明利智も、田夫野人も至り難きは心なり、故に心性の理を窮め盡すときは天地萬物が皆心と成り居ることを自知すべきなり、これは何故かといふに、萬物の靈長たる人間は此の天地間に於て此の大原理を得、全く天地と同根なる不生不滅の活氣を備へ居るが故なり、人々固有にして不增不減なることを自知すれば、六塵の諸法も吾心の全體なることを覺了し、立地に生死の區域を越て正覺をも成就すべきあり、

正當恁麼の時、盡大千界八表四維一微として別處なく、出沒一理に歸し

て生死去來なく、萬法一理にして一理は萬法に歸す、無去乘來、無生無死五須彌山、白毫光青蓮目、七重寶樹、八功德池も悉く心上に煥爛として目前に的然たり、皆是れ人々本具の性なり、然るに業感の强弱、福力の多少に憑りて現行する所のもの同じからず、地獄は之を見て鑊湯の爐炭となし、餓鬼は之を見て聚膿積血となし、修羅は之を見て力兵戈戟となし、凡夫は之を見て娑婆世界となし、諸天は之を見て瑠璃界となし、佛は之を見て常寂光土となす、悟は美服の如く、迷は噩夢の如く一心相續して長劫不變唯業の所感に依りて、見る所全く同じからず、されば佛とは性心の大原理を得たる名稱にして、凡夫とは此理を知らざる者の名目なり、之を得る人は煩惱即菩提なるのみ、謂ゆる澁柿の甘柿と成るが如し、此眞理に體達すれば、未來永劫大圓鏡智に入りて、天地の明暗、森羅萬象、盡く人々本具なり、釋迦大師の天上天下唯我獨尊の言ある良に所以あるかな、夫れ焉んぞ際限ある此五尺の有形上に就て區々の說を爲すものならんや、有形上の此身は全く四大假和合より成立せる一分子集合躰の化物にして出息は入息を待たず、實に電光朝露の如し、狂歌に曰く

うか〳〵と此身をかりて客に來て自儘に長居までをされもせず
春の雪ひとあしつゝにきえて行く夢のゆめこそ世はかなけれ

## 第三　異を顯はし衆を惑はすべからざる事

支那の五臺山に鄧隱峯といへる禪寺あり、此に在るの僧は恒に坐禪を爲し禪餘には村落に行乞するを以て勤めと爲す、昔し國中に戰爭ありて止ず時に神通を得たる一僧あり、之を和睦せしめんとし、忽ち神通を現じ、足に白雲を蹈み、手に錫杖を振り鳴して大空を飛行ること頻りあり、兩陣仰き瞻て謂へらく、是れ大阿羅漢兩軍の潰れんことを憐れみて心配せらるゝならんと、兩軍互に戰を止めて不言の中に却退せしことあり、斯の如きの利生あるすら、その僧の姉比丘尼、之を聞くや直に五臺

山に登り、其僧を誡めて曰く、汝は佛の異を顯はし衆を惑はすことを得ざれと仰せられたる訓戒を忘れたるかと呵責せり、而して此僧又後に謂へらく、佛の臨終には概ね十八神變を現じたまひぬ、我亦神變なき能はずと、遂に都會に出で衆人に佛緣を結ばしめんが爲め、倒立となりて化し去る、袈裟衣は其身に纏ひ、屍骸は固まりて石となりぬ、時に世人の之に參詣する者夥し、然るに復その姉比丘尼遙かに此事を聞き、此の少賣郎また佛戒に背けりと、拄杖を拽て之に臨み、唱へて曰く、汝は生涯眞實の正法を誤り、死に至るまで、異を顯はし衆を惑はす、其罪輕からずと云つて拄杖を振り揚げ、威を震つて打着したれば、その屍石忽ち瓦解氷消せりと、嗚呼彼が神通自在を得て、生死岸頭に大自在を得たるすら尙ほ姉比丘尼の呵責を免れず、況してその妖雲をや、佛在世に於ても、賓頭盧尊者の神通を現じたるが爲め、釋尊の呵責ありて衆中を擯出せらる、況して末代に於てをや



洋教より佛者に詰問して曰く、物体の和合離散は必ず免れざるものにして如何に不生不滅と云ふも、此則を超過すべからずと、然り是れ佛陀の印定し給へる生死無常の原則にして汝の言を埃たず、佛は因果生滅の理と、非因果不生滅の理とを示したまへり、不生滅の理とは眞如法性の妙體にして生滅の理とは阿賴耶識の心相たり、心相は生滅に隨順して三界四生に輪回出沒すと雖も、眞如の妙体は無量劫より以來、今に至るまで變異あることなし、變異あしと雖も、一念の迷ひに依りて生死に輪轉するときは、人の夢を見るが如く、有りもせぬものを有りと思ひ、徒らに喜怒愛樂の相を感ず、然れども其夢一たび覺ぬれば夢中の萬境全く虛僞なり、起信論に曰く是故に三界は虛僞にして唯心の所作なり、心を離れて六塵の境界なしと、境已に六塵あければ無爲無漏なり、何れの所にか生滅離散の念やある、生を喜び、死を悲むは是れ衆生の妄心なるのみ、故に又起信論に曰く、一切の法は皆心より起り、妄念より生ずる

を以て、一切の分別は則ち自心を分別す、心心を見ざれば相として得べきなし、當に知るべし、世間一切の境界は皆衆生の妄心に依て住持することを得、是故に一切法は、境中の像の體の得べきこと無きが如し、唯だ心の虚妄なり、心生すれは種々の法生じ、心滅すれば種々の法滅するを以ての故なりと、誠に然らずや、死する人は未だその死する時を知らず、生るゝ人は未だ生るゝを知らず、譬へば夢見る人の夢たることを知らざるが如し、然れども夢覺れば夢の夢たることを知る、永嘉大師曰く、夢裡明々として六趣あり、覺て後空々として大千もなしと、大千界もなく、六趣界もなければ天地萬物唯一心なり、唯一心の萬像森羅なるが故に盡十方世界は毘盧の妙体なり、經に曰く、若し人三世一切の佛を了知せんと欲せば、應に法界の性の一切唯心造なることを觀ずべしと、一切佛とは是れ何物ぞ、見聞覺知悉く是れ遮那法性の妙體に非ずと云ふことなし、慈雲尊者曰く

迷ふ者は諸佛無上正覺の中に居て三毒を起す、此の三毒衆生を惱亂することゝ屠者の鮮肉を燒煮するが如し、諸佛は常に衆生三毒の中に在りて無漏大定智慧に安住す、此の無漏大定智慧、衆生界に應現して月の萬水に影を移すが如し

と、然れば迷悟唯だ一心にあり、豈面白きことにあらずや

或所に八良兵衛といへる者あり、其人の妻死して、後其靈毎夜夫の枕元に來りて吉凶を告けたりといへる噺を聞くべし、一日八良兵衛ある禪僧に語りて曰く、余が妻死して後、毎夜余が枕元に來り、未萠に禍福を告ぐ、其の言一として的中せざるはなし、請ふ師其理由を詳かに教示せられよと和尚良久して曰く、君の細君存命中、萬事妻の云ふ如くにして暮されたと聞けば、矢張死して後も一切事を指圖する心得にて、夜な〳〵貴公が枕邊に來れるならん、八良兵衛曰く、誠に其れ然らん、和尚曰く、左れば今霄貴公所持の重箱に豆を入れ、蓋を硬くし而して其幽靈來りな

ば即ち問て云へ、茲中に何物ありやと、彼れ如何が之に答へんと、彼れ諾して其夜教の如くにして相待ちぬ、果して丑の刻と覺しき頃幽靈來りぬ、即ち問て曰く此重箱の中に有るは何物なりやと、靈曰く是れ豆なりと、其翌朝寺へ行て前夜の一條を伸べたるに、和尚曰く、今夜は小豆を容れ置きて問ふべしと彼れ又教の如くにして相待ちぬ、幽靈は時を違へずして來りぬ、問て曰く此中に何物ありやと、靈の曰く、中に有るは是れ小豆なりと、彼は愈々驚き、未明和尚に見えて其事を伸ぶ、和尚微笑して曰く、今一夜我が教の如くすべしと、即ち曰く、一昨夜の如く、大豆を容れ置きて問ふべし、靈又必ず大豆なりと答へん、其時貴公は靈に向ッて幾程ありやと問ふべしと、又教の如くして相待ちしに、靈來りぬ、曰く、此中に有るは何物なりやと、靈曰く、大豆なりと、問て曰く幾程ありやと、靈久しく考ふる所ありたれとも答ふることと能はずして去りぬ、其翌和尚に見えて有りし儘を告ぐ、時に和尚示して曰く、此理を能く合點すべし、貴公の心には固より重箱の中に容れたる大豆小豆を知れり、然れども幾程ありしことをば知らざりしならん彼れ曰く、固より知らずと和尚大笑して曰く、果して然らば是れ固より貴公が神經より呼出したる幽靈なれば、貴公の知れることをば之を知ると雖も、貴公の知らざることは彼れ幽靈も知らさるにあらずやと、八良兵衛は漸くにして唯心の所造なることを了知せり、不思議なる哉、其夜よりは遂に幽靈來らざりしと」

持戒の一僧、夜中路上に於て一物を踏みたり、謂へらく是れ必定蛙なりと心中大に苦悶して懺悔しなから眠りに就きぬ、其夜の夢に數百の蛙來りて責ること酷し、曉に及び前夜蹈殺したりと思ひしものを見るに豈圖らん茄子の蹈み碎かれたるものあらんとは、始めて是れ自心の迷ひなりと知れり唐の元曉といへるは海東の人なりき、初め道を天下の名師に尋ねんとて山野の中を獨行せしに、日暮れて林下の塚間に一宿す、時に渴すること甚しきも、その近邊に水のあるなし、然るに暗中一穴

に清水のあるあり、手に掬して之を飲みたるに恰から甘露の如し、斯くして其夜は心地よく坐睡す翌朝に及びて其穴中を見るに豈圖らんや髑髏なり、之を一見するや忽ち嘔吐を催せんとす、時に忽ち又猛省して思へらく、昨夜淨水と思ひしも心なり、今不淨水と思ひしも亦心なり、嗚呼心生すれば種々の法生じ、心滅すれば淸髑不二なり、如來大師の曰く三界唯心なりと豈我を欺かんやと是よりは道を名師に求むることを止め、即日海東に還り、華嚴經の註釋を著はして大に、圓頓の敎旨を弘められたり、後來覺範慧洪といへる人、元曉禪師の傳を讀み、且ツ思へらく、晉の樂廣といへるもの、或人の家に招かれ酒を飲むに盃中に蛇影の在るあり、然れども忍んで之を飲みしに、夫れより重病となりぬ、種々その原因を尋ねしに盃中の蛇影より來れること詳かにす、而して蛇影は是れ何物ぞと探索せしに、その招かれし家の床上に弓あり、此弓の盃中に映じて蛇形と見えしことを以てす、樂廣は之を聞くや忽ちにして其病愈ゆ、今元曉禪師の事蹟と相異なるなしとて即ち一偈を作て曰く

夜間髑髏元是水　容盃弓影竟非蛇　箇中無地容生滅　笑把遺編篆縷斜

是に依りて三界唯心萬法唯識の佛說に參ずべきあり

極樂も地獄もおのが身にありて鬼も佛も心ありけり

## 第四　萬法は唯心の所現なる事

盛衰消長は世上の常なり、昔の名劒も今は薪割となりぬ、昔は穢多として社會の邊隅に置きしもの今は平民となりて差別あることなし、貧乏人にもあれ金持にもあれ或は高く成り或は低く成りて貧富貴賤の定まりなく、新陳代謝して停りなきは浮世の狀態なり、然れば今少し時を得たればとて、時に逢はざる人を小馬鹿にするはする者の馬鹿を自白するのみ、故に縱令利口發明の人たりとも時に逢はざれ

ば貧賤に暮すあり、左のみ智慧なくとも其時に逢へば利口に見え鼻頭も自然に高く見ゆるものぞかし、故に貴きも賤しきも、馬鹿も利口も泣くも笑ふも、苦みも樂みも都て北邙一片の煙となるのみ、玉の臺に住むも、破れし茅屋に暮すも皆前世に作し置きし影法師にて、今は只假の旅宿あり、名聞利欲の巷に彷徨し、一大事の本道に出る氣のなき法師は眞に氣の毒なれ

余倩々世間を見るに彼の五塵に汚され六欲に縛まれ、寢ても覺ても苦勞の絶間なき者なるのみ、是皆泥水に醉へる魚の如し、之を夢の中に又夢を見るといふ、その夢中の消息を見るに只喰ふて寢て起きて、又喰うて寢て起きて、さて其末は塚間一堆の塵土と化するなり、何故その土となりぬるぞ、是れ初めからして土の化物あればあり、面白な土が人と成り人が土と成る、如何にして斯くなるぞ、言はても知るき、父母の交會に依り何時の間にかは土が人とはなりぬ、請ふ見よ土といふも水といふも將た人といふも暫く假の名にして其實体あるとなし、之を空々寂々とや云はん、空々寂々といふも夢の如く幻の如し」空々寂々といふも亦此の幻化中に空寂ならざるものありて存す、古者曰く、幻化の空身即法身なりと、法身とは是れ何物ぞ、見るべからず聞くべからず、法は見聞覺知に與からずと雖も、不死不生にして見聞覺知の間に浮沈出沒するを見る、之を生死透脫の主人といふ、生死を透脫すといふも蛇の皮を脫ぐが如く蟬の抜殼を見るに等し、其の主人公は久遠劫より未來際に至るまで、或は出生し或は入死して暫くも停む時あることなし、是故に今世に於て善を作せば未來に於て亦善を生じ、惡を作せば惡果を生ずること必定たり、縱令富四海を保つも無幻空華の露命ある中のみ、露命忽ち盡きぬる時は一物も隨ひ行く者なし、隨ひ行く者は只善惡の業報のみ、是れ全く法身に生滅なきが故あり、故に心あらん者は勤めて善事を行せざるべからず、作善は我田

へ肥料を入るゝが如し、然るに余が此の寐言を設けて何か利口らしく皮骨を並ぶるも、文字必竟空にして相あることなし、只々余は生來無常の觀念を起してより神佛に祈誓し、十二歳より此事の爲にして廿二歳の時終に不生不死の道を極むることを得たり、想ふに善因拙なけれども初心の願は縱令生涯乞食の身となるも東奔西走して信心の男女に向ひ明々たる本心の何物たるを語らんと、然るに從來空しく過して思ふ千萬分の一だも果すこと能はざりしを憾む、然れども余が常に不可思議とする所は、此の五尺の形體朝より暮に至るまで行住坐臥の主人公となれるもの是なり

此の主人公は天地の太祖たり、萬物の根原たり、死せども死せず、斬れども斬れず、燒けども亦燒けず、千生萬刧にも盡ることなし、之を奇々妙々不可思議となす、之を證得すれば煩惱も即菩提となり、生死も即涅槃となり幻化の空身も即法身となる、亦妙ならずや





佛敎は固より唯心敎にして首尾一貫すれども、造化敎には多岐ありて本來の顚倒するものあり、彼れ造化敎は心外に神ありとして萬事萬物之に依賴するは、人生の眞智を晦ますこと少なからず、余は之を論せざるを得ず、其敎を奉ずる者曰く、吾が信ずる所のものは眞の活神あり此の活神は無始無終にして全智全能たりと、余が曰く、我が信ずる所のものは心外の活神にあらずして心內の活靈たり、之を眞如法性と云ひ自性天眞佛といふ、此活靈、此眞佛、大には方處を絕して盡法界に遍く、細には無間に入て行住坐臥當處を離れざるなり、されば神より授りたる者にもあらざれば、佛より戴きたる者にもあらず、各自我が心內に向つて躰究練磨すれば本來固有の一物なることを了知すること、水の冷を知り火の熱を知るに同じ、此の五尺の形躰に即して究むる所あらば洞然明白ならん、之を法界唯心の全躰といふ、唯心法界に證入せば全く彼我の妄見を亡じて天地と同根萬物と一躰ならん、故に生死ありと雖も亦

生死の見なし

若し人此の生死岸頭に安心立命を得んと欲せば先づ我が一靈の心性を究むるにあり、古者曰く、庭前有月松無影、欄外無風竹有聲と、其意は誰人も同じ樣に庭前に月を見るに、月と見るも我心なり、松と見るも我心なり、影と見るも我心なり、されど此月と松と影とは別物でなく、松は其儘影と變じ、影も亦松と變ずるは固より其の心性に定相なければなり其の移り變る物に印して松は翠に花は紅の色を現はす、是眞如實相の現象に非ずして何ぞや、實相の現象なりと雖も、退いて我が脚下を照顧すれば物に隨ひ緣に應じて前念は後念を引き、後念は後々念に移り、前滅後生後滅前生して暫時も間斷あることなし、譬へば人の呼吸の前滅後生するが如し、此の念起念滅を究るれば亦是れ隨緣眞如にあらずと云ふことなし、西天二十二世摩拏羅尊者偈を說いて曰く

心隨萬境轉　轉處實能幽　隨流認得性　無喜亦無憂



と又二十三世鶴勒那尊者、偈を說いて曰く

認得心性時　可說不思議　了了無可得　得時不說知

去れば朝なり暮に至るまで、人々の心識轉變生滅するも、その生滅に即して是れ不生不滅あり、之を悟人の境界といふ、悟人の境界より達觀するときは萬法悉く不守自性の隨緣眞如ならざるはなし、之を萬里一條鐵と云ひ陰陽不到の地と云ふ、陰陽不到萬里一條鐵、之を名けて寂光土と爲す、金剛般若經に曰く、是法平等無有高下と、是を阿耨多羅三藐三菩提界と云ふ、此中には有無得失の高下長短あることなし、長短あれども是れ世間の長短にあらず、高下あれども、是れ世間の高下にあらず、何となれば長短高下は皆法性の周流にして餘ることなく欠ることなし、有即ち是れ無、無即ち是れ有にして理は元來一なり、一理齊平の空中には有と譽くの音あり無と譽くの聲ありて、此の音聲は縱令天地の靈ることあるも、永劫に亘りて盡ることなし、謂ゆる空中とは心空なり、天地山

河は世間の空中に在るが如く、有無得失は攝めて此の心空にあるを見る、心空の廣大なること際邊なければ十界三千の諸法も亦豐かに此の空中にあるなり、豈奇々妙々ならずや、此の奇妙不可思議なる心中に於て男女老少日月星辰、天主天父、乃至地獄天堂の歷々分明なるを見る、於戲、我が唯心教の卷舒自在なる夫れ是の如し、十方の智者は須らく此宗に入るべし

## 第五　無常を觀じて常寂に入る事

月日は水の流の如く、去年が何時の間にかは今年と成り、昨日は醉夢の中に今日と流れ行く、恰も滊車滊船の中に寢て居るが如きものなるぞかし、今夜横濱を出れば明朝はチャンと大阪に着して居る如く、茶を呑む間も、飯喰ふ間も死ぬる方へ、一息〳〵近寄るのは丁度水の流るゝが如きものなるぞかし、噫、少壯は老ひ易く、嬋妍の花は散り易し、然るに浮雲の富貴を恃て、此世界に於ける心配と苦勞とは我が壹人の持前なりとする人あり、此人は設ひ五千貫目の身代たりとも、其實は糞溜の蛆虫が、雪隱を我が世界として樂み、井戸の中に游泳する蛙の如きものなり外に安心立命の樂境あることを知らず、我身の無常なるにも氣付ず、死ても命がある積りにて、朝から晩まで、欲の皮は千枚張にドエラク厚く成り居るを倩々考ふるに、昔の竹馬は今の杖となり、艶のありし鬢も今は雪と換り、花の姿は何時の間にか散り行きて、今の我は昔の我にあらず、否々今の又其今も矢張流水の我が命なりければ、朝の露と消ねなんことを思はざるべき

近松門左衛門は肥前唐津の臨濟宗近松寺に住せしが、後に還俗して戯作者の大家となり、戯作の多きことは世の皆知れる處なりける、中にも、此世の名殘り身の名殘り、死に行く身を譬ふれば、わだしが原の道の霜一足宛に消て行く、夢の夢こそ哀れなれ、數へ〳〵て曉の七ツ

の鐘が六ッなりて殘る一ッが今生の鐘の響の聞きをさめ、寂滅爲樂とひゝくなりとぞか、こちける

此の受け難き身を受て居ながら、我が心性を天父に依賴して死後天堂に生るゝといふも、即今肯ッて其驗なし、其驗なければ安心立命なし、縱令死して天堂に生れ、永麻を受る人も、即今此の現境に即して我が心性を盡して地獄天堂を超過し、自己眞正の靈位に昇る、豈夫之に如んや、我が靈魂を天神より授與されたりといふ人も、其の自己心を窮理すれば、其の極度遂に靈魂に歸着するを以て、全く天神より授與されたるものあるか、天然固有の心性なるか、此の一事は世間通常の窮理上よりするも殆ど明かなり別して大智の人間は、只々他念なく、靜坐して丹田に心を据ゑ、呼吸の音聲を窮むるにあるのみ、故に死して永麻を受るより、寧ろ先づ我が心性を盡し、而して後不是あらば又永麻を受るも可なり、左すれば人に問ふまでもなく、水を呑で冷暖自知するは勇猛智者の勤務



なり

## 第六　上帝と陀彌とは天地懸隔の事

人の事は扨て置き、我身さへも我心の儘ならぬ世の中かな、又誰人も心の儘になる世ならば誰しも年は取り度なきもの、何時までも十七八の花盛り、柳の腰に櫻を咲せ、梅の花の匂ひを含ませたきものなるぞかし、儘ならぬ浮世の有樣は、心許り已れやれと思へども、腰はかゞむ齒は拔る、年に一度の豆撒も數取るばかり、何うやら斯うやら、鵜呑にしても顏は師趨の干蕪、耳は遠く目は疎く、樂のなき身あれども、誰をか恨み誰をか咎めん、古歌にも

△眼はかすみ耳に蟬なく齒は落る降らねどつもる頂の雪、又次に

△皺がよる黑子はできる腰かゞむ、天窓ははげる髮しろくなる

△手は振ふ足はひよろつく齒はぬける耳遠くなる眼はうとくなる

△身に添ふは頭巾襟捲つゐ目鏡

たんぽ溫石しびん孫の手　△うとくなる氣短になる愚痴になる思ひ出すこと皆うとくなる　△又してもおなじ話に孫ほめる達者自慢にむかし高言

茲に耶蘇宗の安心立命の事を概略して云へば、天上天下十方四惟に上帝の存在することを確信して、上帝は必ず善男女を愛憐したまひ、天堂快樂の世界に導き、毫も人我を挿まず、浮世の魔鬼に魅せられざらんことを哀訴せよと云ふに在り

潛かに之を思ふに、中下の人を導く趣向に至りては巧みならざるにあらず、然れども人文開明の今日に至りては、千個万個の中に信心勇猛の大智在りて之を論ずることありなん

天上天下十方四惟に上帝の存在を確信すれば、十方河海たとひ蝍蛬の眉毛に至るも存在し給はんと論を俟たざるなり、その第一に存在し給ふ所の我が心性を以て直に出息入息につき、此の心性を只管に体窮練磨すれば局り我が靈魂に歸着せん、其時こそ始めて活きたる固有の自己心なるか、又は授りし假物なるかを自知するに易からん、名は佛たりとも耶たりとも、その存在を研究するに必要からんと考ふ、是れ上等社會に於ける安心立命の大旨なり

又淨土門の安心も畧〻西教の勸めと相似たるを以て、茲に之を掲げ以て其差別を示す、曾て其の管長徹定師の曰く、人來つて問て曰く、洋教と左のみ惡むに足らず、淨土所立の極樂も且く横竪の別のみにして大同小異なりと、定師の曰く、若し然らんか大に氷炭の別あり淺々に看過すべからず、譬へば賊の物を奪うて走る時、之を逐ふ者も亦奔る、その同じく奔るを以て同罪とするが如し、その走ること同じきも其意大に異なりぬ、或人その異なる所以を問ふ、師答へて曰く、佛の勸誘する所は無諍無爲の樂邦にして、之を西土と說けども畢竟一念を離れず、故に去此不遠といふ、只此の一念萬法を具有す、故に經に曰く、心淨ければ佛土淨

しと答へられしなり、然らば一念彌陀佛といふもの全く他物に非ずして已心佛の謂なり、然るに西教の勸むる上帝は全く心外の他物にして、彌陀佛と相去ること豈夫れ雲泥の差のみならんや、佛教の生佛一如は全く一如にして二如にあらざれども、耶教の神人合一は其名同じきが如くなれども、其實全く別物なるを以て、之を同一視せんとするが如きは、玉石をして混淆せしむる暴論といふべきのみ

## 第七　佛教と外道哲學との比較

人の人たる道は正直と堪忍と、慈悲と、分別と、思案と、活潑力と、用捨とにあり、此外に生を憐むは日月の如く、人を貪るは芽生の木を摘むが如く、不孝不悌は人面の獸なり、眞實は寶の有り處書を讀むは暗夜に提燈を持つが如し、無慈悲の吝嗇坊は此世へ金の番人に來れる人なり、手習は眼の療治なるべく、辛抱は物の成就する基なり、諦了は心の養生なり、喧嘩口論は後悔の基なるべく、朝起と謹慎とは身の祈禱なりての辨別あき人は、いづれ人の仲間を外さるゝ事ありと知るべし」

昔し或所に一人の老婆あり、尋常神佛を祈りしが終に奇怪の事を感ずるに至れり、毎夜唱ふるに神明佛陀の名號を以てす、會々病者の家中に在るも、婆心には全く神佛の來現あるが如くに覺ゆ、而も老婆の心は恍惚として夢に魘はるゝが如くにして、或は稻荷と云ひ、不動と云ひ、鬼子母と云ひ守護神なりといふ、又或時は某者の六親姉妹の亡者なりと放言す、人之に問ふことあれば答ふるに昔日の事實を以てすること審なり、仍てその老婆を信ずる四來の男女は踵を續で來り、未萌の事を窺ふ者門に市を成す、斯くて三四年を經たりしが、會々老婆病て床に臥すること二週間、然るに、老婆が常に祈る所の神佛、渠が夢中に現じて須臾も枕邊を離れず、老婆悲鳴して魘はるゝこと酷し、傍に人あつて呼び覺すに至れば、夢忽ちに破れて冷汗滿身を濕すこ

と屢々なり、其の實子之を白隱禪師に白す、時に師老婆を見舞ひ、耳根に近きて大喝一聲せられたり、時に婆子肋めて夢の覺めたるが如く、師に謝して曰く、私の病篤きに隨て神の來れること益々多し、寸時も安慮の思ひあることなし、師の曰く汝元來惡魔の爲に魅さるゝこと已に久しく、汝の心を奪うて惡趣に誘はんと欲するあり、汝が從來思ふ所口走る所は皆是れ惡魔の所爲なりと、而して師が眞讀したまへる大般若の靈牘を四方の戸口に張らしめられしかば、其後奇怪の事頓に止みたりとぞ、魔力を以ての故に既往及び將來の事を豫知する、或は人間の及ばざる所もありなん、されば之を信するは愚の至りなり

西洋哲學者ゼノフアネス、ピタゴラス其餘の諸賢哲の說も、我が佛敎と略相似たるものあり、今其一二を謂はゞ天地間に存在する物、決して永劫變ぜざるにあらず常に轉展流行して瞬時も止まることなし、之を常住不變なりと認るは吾が五官の迷ひなるのみと、余曰く、變は不變より出で、不變は變より出づ、故に變と不變とは一体和合なりと

又一は萬物の初めにして万物は即ち一に歸す、故に一は即ち万物なり、此一無生なるが故に不變なりと、余曰く、此中常住不變とは吾が禪門にて萬里一條鐵と云ふが如し、瞬時も止まることなしとは我が佛法にて諸行無常と云ふが如し、旦く呼吸に就て之を言はんに、呼の時は吸滅し、吸の時は呼滅しつゝあり、是れ人々の本具なれども窮理せずしては了知することと難し、是の如く萬物皆同一理にして、譬へは山川草木飛鳥走獸に至るまで凡そ眼を遮り耳に觸るゝもの一として無常あらざるものなし、況や人心の如き寸時も間斷なく、前念滅すれは後念生ず、念々從心起念々不離心なり經に曰く、一刹那間に五百の生滅あり、と、順中論には三種の無常を明す、一には念々壞滅の無常、二には和合離散の無常、三には畢竟の無常是なり又此の一無生なるが故に不變ありとは、我が佛

法にて無始無終と云ふが如し、皆是宇宙の原理なりと雖も、人々我が窮理の浅深に隨て肯ふに厚薄あるのみ、蓋し此一を窮むること最もかたし、凡そ此一を得るときは萬を得ること易し、譬へは大海の潮水万洋共に違はざるが故に一滴以て其味を知るが如し、されば天地と雖も一心より見るときは長日の半時間の如し、故に眞の安心立命を了知せんと欲する人は、萬事を抛ち、臍下丹田に念慮を静めて呼吸の息を窺盡するにあるのみ、此一と云ふは即ち心なり、心は盈て虛なり、晦して明なり、高ふして蓋ふべからず、廣ふして涯る可らず、微妙甚深得て思議すべからざるものは心なり、故に彼の道理此の道理と、當てつ比べつの考を止めにして、實際に心性の如何を究理すれば、其儘釋迦の位置にも進み、達磨の位置にも入るは誰人も見易きの理なり、此の究理たる難中の難なるが故、古徳の頌にも　唯箇一點無明焰　練出人間大丈夫と、唯偏に時々刻々に臍下丹田に心を静め、呼吸を究盡するにあるのみ是を以て昉の一歩を差へば末にして千里を隔つとは是あり、併し人は先入主となるの謂にして、一旦自已が首を入れて學び込だることは何時までも何の道より遙に優ると思へるものなり、故に如何なる高尚の大道あるも、舊習を改むることは容易ならざるものか、然れども前非を知て之を改むるは大智の賢人あり

又西敎者より論じて曰く、神あくんば天地山川あるべからず、神ありて造るが故に天地萬物ありと、余曰く何ぞ夫れ然らん、山河大地は性海の一滴なるのみ、西天の十二祖馬鳴尊者、十三祖迦毘摩羅尊者に問て曰く汝を誰とか名くる、その眷屬多少ぞ、答て曰く我を迦毘摩羅と名け三千の眷屬ありと、問て曰く汝が神力を盡して變化せんこと如何、答て曰く我れ巨海を化して極めて小事と爲すことを得、問て曰く汝性海を化し得るや否や、曰く何をか性海と謂ふ、我れ未た嘗て知らず、尊者爲に性海を說て曰く、山河大地皆依て建立す、三明六通茲に出て發現すと、迦毘

摩羅尊者はこの垂示を聞きて佛法に入りたまへり

萬法唯心は佛教の樞要なり、然れども心は有に屬せず無に屬せず、而も尋常孤明歴々として個々圓成せり、圓成せるが故に不増不減なり、不増不減不死不生無始無終の心性は天外地外に充塞して、その邊際を見るべからず現今の我は即ち此中に在りて不滅不生なり

## 第八　無明の實性即佛性の事

京都紫野大德寺の一休和尚は、幼少の時より才智萬人に勝れたまひて小僧の時の名を宗純と稱し、怜利の聲高かりしが、或時門前の町人曰く宗純サン私の親の七回忌に當りますけれども、貧乏にして御僧方を招くことが出來ませぬ、ソコで墓所への供養として一本の率都婆を買ひましたから、何卒亡き親の爲に之を書て下されといふ、時に宗純は何を思ひけん、よし〳〵承知したと其の率都婆を取り、眞黑に塗て與へける彼の貧人是れは餘りの事と思ひしが、併し是れには譯のある事ならんと押し頂き、此事を時の住持に白しければ、住持の禪師之に一首の狂歌をよまれたり

○あかるくて行かるゝ道を墨で染め死出の旅路をなんと行くらん

と、時に宗純はすかさず之に答へて

○あかるくも暗くも行くが佛なり死出の旅路によるひるはなし

と、よまれける、時に住持のこれにつぎ

○あかるくも暗くも行くが佛なら元の白木でおせたきはせん

とありければ、又宗純これに返歌して

○とはいへど元の白木でおくときは御身も我もくちすぎがなし

とぞよまれけりとなん、これは余が若かりし時聞きし記臆のまゝを茲に記し置くのみにて、これぞ宗意に叶ふと云ふにはあらず

衆生流轉の最初は一念の無明と説けり、この無明は如何なる因緣によりて起りしや蓋し法身は眞如の理體にして靜寂無相なり、譬へば明淨なる鏡像の表裏に洞徹して一點の染垢なきが如し、豈其間に無明と名くべきの煩惱あらんや、その惱煩なき淨璃瑠海中に妄風の起るべき謂れなし然れどもこの無明によりて生死の根由兆し、五道の輪廻止むときなし、是れまことに不審ことの限りからずや

自から答へて曰く、永嘉大師の證道歌を見るに「無明實性即佛性、幻化空身即法身、法身覺了無一物、本源自性天眞佛」といへり、この無明の實性即佛性の理さへ得心すれば、直下に生死を脫するなり、佛道を學するもの思へらく、無明は必ず斷除すべきものなりと、是れ然らず、無明は必ず佛性と同參なり、佛性獨り存立するものにあらず、無明も亦然り、この無明と佛性とは一心の表裏なり、譬へは一枚の紙の如し、表裏あれども別体にあらず、故に云ふ無明の實性即佛性なりと、彼の善と惡とは雲泥の相違あるが如くなれども其實は一心の順逆なるのみ、一心順逆起するものの之を善と云ひ、逆起するものの之を惡と云ふ、順逆齊しく是れ一心の所變なるが故別物にあらず、只迷ふ者は無明の惡煩惱を增長して生死の苦惱を受け悟る者は佛性の善菩提を增進して涅槃の快樂を受く、而も迷悟同一なることは水と波との如し、水の体りの儘波にして波の体その儘水なり、是故に煩惱即菩提、生死即涅槃といふ、人々此身此儘法身にして、幻化の外別に非幻の法身あるにはあらず、是の如く法身の何物たることを覺了すれば無明の暗は畢竟空にして一物の見るべきものなし

この無一物の本体を名けて自性天眞佛といふ、六祖大鑑禪師の偈に曰く本來無一物、何處惹塵埃」と、是に於てか涅槃經に、一切衆生悉有佛性如來常住無有變易」と說きたまへり、又六祖大鑑禪師の曰く、凡夫即佛、煩惱即菩提、前念迷へは即ち凡夫、後念悟れば即ち佛、前念境に著すれば即ち煩惱、後念境を離るれば即ち菩提」と誠に適切なる示訓なり、仁王經に曰

く、衆生未だ成佛せざるときは菩提を煩惱と爲す、衆生成佛すれば煩惱を菩提と爲す」と執著すれば煩惱となり、執著せざれば菩提となる、此の大菩提界の消息は即ち如何、長者論に曰く「無邊刹境、自他不隔於毫端、十世古今始終不離於當念」と、先德又曰く、十方法界爲身體、十方國土爲心性、十方法界爲佛相」と、又曰く、十方依正一塵中、無限遮那轉法輪」と、又曰く、乾坤盡是黃金骨、萬有全彰淨妙身」と、張子も亦曰く、聚ルモ亦吾ガ躰、散ズルモ亦吾ガ躰、死ノ不亡ヲ知ル者ハ、俱ニ性ヲ言フ可シ」と是れ佛家の變にして不變、不變にして變ある平等即差別の理と同じきものあり、是の如く十方法界を以て吾人の全躰と爲し、塵々刹々に大法輪を轉ずる底の境界に安住せざるべからず、是の如く安心立命するときは盡天盡地、身心內外、悉く是れ佛性の脫体現成にして、除くべきの無明あることなし」永平道元禪師、佛說の悉有佛性を拈じて曰く、悉有は佛性なり、悉有の一分を衆生といふ、正當恁麼の時、衆生の內外すなはち佛性の悉有なり」と



此の知見開發するとき、盡地盡界、皮肉骨髓、何物か佛性にあらざらん、佛性は是れ解脫界なり、衆生は此の解脫界中に在りて纏縛せらる、譬へば蚕の自身より絲を出し、絲の爲に纏縛せられて死するが如し、憐むべし

## 第九　人生の一大事

古德曰く、參禪學道は一生の大事なり、忽にすべからず豈卒爾ならんや」と誠なる哉、參禪學道は人生の一大事なり、生を明らめ死を明らむるは參禪に超えたるはなし、參禪にあらざれば眞道を了知すべからず、然るに身この佛門に在りながら、參禪究理を以て他人の事と思ひ、身命を忘却して大道の爲に參究工夫するもの稀なり、況や在家に於てをや、併しながら誰人も眼光落地四大分離するの時に到りて、本心歸着の理に乏しきは、平素の安心立命なきが故なり、間に此の大事を知りて深く研究する者あるは泥中の蓮なり、學道の人に告ぐ、此の人世は三界無安猶如

火宅とありて久しく停住すべき處にあらず、殊に如夢幻泡影、如露亦如電とありて、有爲轉變の此身は何時の間にか無常の殺鬼に伺はれ、貴賤老少の別なし、念々刻々に行立てられつゝあり、其時には縱令項羽の勇も間に合はず、辨慶の力も賴みとするに足らず、只賴みとするに足るべきものは見聞覺知の主人公是なり、之を心王識ともいふ、是れ天地の太祖にして萬物の根源なり、又諸佛諸祖の本源なり、本源なりと雖も今日見る底聞く底、目前に歷々たり、形体なくして十方に通貫せり、故に言ふ見聞覺知悉く是れ本有の靈光なりと、耳に聞き、鼻に齅ぎ、口に談じ、手に執捉し、足に運奔する、素より主人公の致す所なり、是の如く孤明歷々たるものなるに、博學の士も五年八年、之を究明して承當すること能はざるは何ぞや、是れ他なし世智の爲に障礙せらるゝに由らずんばあらず故に謂ふ、情生ずれば智隔り想變すれば體に迷ふと、之を智障又は理障といふ

古人曰く、見聞覺知非二一二、山河不在鏡中觀二とありて、見聞覺知は別々の如くなれども畢竟是れ一なり、一なるが故に眼で聞て耳で見るといふも敢て奇怪の事にあらず、此の一致一境なるを宗鏡又は寶鏡といふ、趙州は呼て之を無といひ、白隱は呼て之を隻手の聲といふ、趙州無字、此中古今變色あり、生滅の沙汰なし、永劫常住にして歷々分明なる之を自己の本家鄕といふ、迷人は之を知らずして生滅路頭に彷徨す、悟人は驀直に此の本家鄕に進入す、之を我宗にては見性といふ、學人をして見性せしめんが爲め無數の公案を授くることあり、玆に一二の例を示さば

汝虛空を繩にかつて見よ、學人此の工夫に日を費すこと月餘、漸くにして、此の公案を透過するに到る、次に又示して曰く

汝燒火箸より水を出して見よ、これに日を費すこと一月有半、次に又汝人の橋上を過るに橋は流れて水は流れず是れ如何と、之が爲に工

夫すること一月若くは二月に及びて透過するに及ぶ、次に又
汝思へ世界に風吹けども動せず、地震へども動せず、無始劫來不枯不
動の大樹あり、是れ如何と、之に工夫すること半年ばかり、次に
汝、隻手の音聲を嚙で吐き出し見よと、これに又半年を費す、又次に
汝、達磨の這裏を持ち來れと、これに又半年を費す、次に
汝、富士山を印籠の二重目より取り出して見よと、又は煙管の中を行
道して見よと、又は柱の中に身を隱して見よと、又は無手にして物を
取て見よと、又は一切の音聲を止めて見よ
と、斯の如き公案の爲め老僧も全く四五年間を費し、晝夜飲食を忘る
程なりき、然れども是れたゝ初入のみ、此の初入を透過して後、本則とて
古人の古則公案に入る、そは無門關、碧巖集、從容錄等の祖錄是なり、是等
の爲に刻苦碎身凡そ二三十年を經て漸く達磨門下眞傳血滴の活祖意
を得而して祖風を擧揚し、祖燈を聯續するの人と成るなり、老僧の參得

せし宗師は、安政年間の人にて、雪潭、蓬洲、蘇山、迦陵、雪航等の諸老宿なり
茲に一話あり、大衆一時作務するの次で(作務とは此日山に入りて薪
を取りしなり)蓬洲老師(今は故人となられたり)特賜大圓正覺禪師なり、
自から室内を出で、頻りに喚鐘を扣かる(これは總參として參禪の爲め、師
家より大衆へ報告するが爲に小鐘を鳴らすを例とす)故に知客寮より
余に命じて曰く、大衆一統薪作務を爲し居る故此事を老師へ申上げよ
と、即ち諾して老師の許に到り、大音に此事を告げしこと五六聲なりし
も、師は唯他念なく鐘を鳴して餘念なし、漸くにして老師余を顧視し叱
して曰く、人の側へ來るに默て來るは何事ぞと怒鳴りたまへり、此の一
言誠に味ひあり
此の大事を了畢することは容易の業に非ずと雖も、達磨大師西來の後
は幸に單傳直指の妙道を見聞す、大師若し西來したまはざれば、東土日
本の衆生爭でか如來大師の眞訣を聞くことあらん、達磨大師傳法の偈

に曰く、吾本來此土、傳法救迷情、一華開五葉、結果自然成、と、大師より已前名相の佛法傳はれりと雖も、未だ眞實の佛法傳はらざりき、今幸に此法傳はりぬ、宜しく宗師に參じて已躬下の一大事を明らむべきなり

## 第十　疑團は參禪の初歩

古人云く、大悟十八返小悟數を覺えずと、誠ある哉、大疑の下には大悟あるべく、小疑の下には小悟あるべし、參禪の要は先づ須らく疑ひを起すべきものなり、その疑ひは是れ何物なるぞ、謂く打ては響き呼べば應ずる底是れそも何物ぞと疑ふべし、何物が此の廣大無邊の世界を見るか、何物が種々雜多の聲を聞き分るか、何物が行住坐臥せしむるか、何物が飲食するか、何物が寒暖苦樂を知るか、此の見聞覺知の主人公は如何なるものなるか、諸人或は謂へらく、そは我等が胸中に心といふ一物があり、此の五尺の形体をクル〳〵と巡り、或時は見聞し或時は覺知するなりと、然れども此は是れ見聞覺知にして主人公にはあらず、番頭手代奴僕の如きものなり、古人が奴を認めて郎と爲すとは之を誡めたるものと知るべきか

昔し竺尙書、長沙の景岑和尙に問ふ、蚯蚓斬て兩段と爲すとき、兩段俱に動く、未審佛性阿那箇頭にか在ると、沙曰く妄想すること莫れ、書曰く動くを爭奈せん、沙曰く只風火の未だ散せざるが爲なり、書無對、沙尙書と喚ぶ、書應諾す、沙曰く是れ尙書の本命にあらずや、書曰く即今の祇對を離却して第二箇の主人公有るべからずと、沙曰く尙書を喚て今上と作すべからず、書曰く與麽ならば總じて和尙に祇對せざるものは是れ弟子が主人公なること莫しや否や、沙曰く但祇對するのみに非ず、老僧に祇對せざる者も、無始劫より來た是れ箇の生死の根本なりと

是に於て乃ち頌を示して云く　學道之人不識眞　秖爲從前認識神

無始劫來生死本　癡人喚作本來人　と是れ竺尙書が、徒らに見聞覺知を認めて本來人と思へる妄想佛性の錯を誡められたるなり、此の一段の因緣に依りて深く參究工夫する所なくんばあらず、尙書は下官にして今上帝にあらざるが如く、見聞覺知は是れ奴僕にして主人公にはあらず

此の主人公は無量世より以來、無我無念の古鄕に住して變異あることなし參禪は須らく此の主人公に相見せざるべからず、之に相見するを見性といふ、此の主人公の妙智力に至ては天地を包むも尙ほ廣しとせず、又一毛端に納むるも天地尙ほ窄く一毛却て廣し、其壽は無量にして過去現在未來永劫不生不滅なり、この不生不滅の主人公は六根門頭に現在前して箸を執り飯を喰ひ且ツ行住坐臥しッゝあるなり、この本具圓成の主人は久遠實成の淨法身にして釋迦達磨と異なることなし、然るを知らずして、自ら甘んじ、凡夫下劣の漢なり、我は權兵術なり、八兵術なりと思へるは不可なり

白隱和尙が隻手の聲を聞けと示されたるは、此の主人公を知れよとのことなり、魂魄とか心識とか佛性とか種々の名はあれども、本來形名なく天眞性相を亡ずるものぞかし、父母より受けし此の五尺の形躰をば、足の爪先より、頭の頂まで、煙草庖丁をもて切り刻むと雖も、只々その痛みを知るのみにて、心といへる一物もなければ、魂といへる塊もなし、只その泣き叫ぶ聲と共に死し去るのみ、左はあれど其の泣き叫ぶ聲その物が局り心といふものにて、能々探索すれば見聞覺知の主人公も又其中に在り、其中に在りと雖も、見んと要せば白雲萬里、擬し去らば千尋攀づべからず、有心を以ても得べからず、無心を以ても得べからず、是れ學人の實參實究を要する所なりとす、學者は知解の爲に礙へられ、愚者は無明の爲に遮られて本來人に承當する能はず、如何せば則ち可ならんか、如かじ人々具足の見聞覺知に和して自知自得するのみ、正當恁麼の

時見聞覺知を認むべからず無我無念一心不亂になりて從晝至夜自身他身を忘れ、天地一枚打成一片の王三昧に入らば、十方虛空都盧消殞して菩提妙明の元心儼爾として法界を圓照せん、楞嚴經に曰く、圓明の精心、中に於て發化すれば、淨瑠璃の內に寶月を含むが如しと、之を父母未生以前の自己天地の太祖萬物の根元と云ふ、亦是れ白隱叟手の聲と云ふ、禪門にては之を最初の句と云へり、此の關門に入るを參學の初步と爲す、亦是れ心華開發の時節と云ふ

是れ唯り禪門の坐禪三昧なるのみならず、彼の念佛三昧に入るも亦然り我と佛と二物對待するときは、未だ其の妙理に體達せざるなり、已に對待を絕して生佛一如の境界に入る、之を念佛の奧義と云ふ、歌に唱ふれば我も佛もなかりけり、南無や阿彌陀の聲のみぞして」と是れ誠に妙なるが如くなれども尙ほ蹤跡の在るあり、次に唱ふれば佛も我もあかりけり南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛と是ぞ眞に絕對不二の念佛なれ、

又口に南無妙法蓮華經を唱ふるも亦心華開發の妙旨にして、念佛三昧と異かることなし、此の一念無念の中に於ては、三世の諸佛十方の如來と同道唱和せんのみ、故に念佛題目坐禪皆一致にして何れも本命元心に通達するの一路涅槃門たり

抑も佛道は不生不死の自性を自知自得するの法なり、此の人生に於ける一大事は死より大はるはなし、死の大なるを明めて動着せざるは佛家の一大事因緣なり、生は春の如く、死は冬の如し、春夏秋冬は天地の一變化にして、生死去來は心海の一波瀾なるのみ、故に生死去來は眞實の人躰にて縱ひ生にもあれ、死にもあれ、何の懸き恐るゝことやある、生は生に任せ死は死に任す、何をか悲み何をか憂へん、是の如く明むれば生死に即して生死を解脫す、この解脫大界を名けて唯心の淨土、寂光の明土と曰ふ、其の主人公を名けて巳身の彌陀無量壽如來とも、自性天眞の如來とも曰ふ、正與麼の時は萬象之中獨露身なるがゆゑ、六塵の諸法も

他物に非ず、山河大地も亦是れ法王身の全躰なるを以て、穢土即淨土、娑婆即寂光なり、盡地盡界も我が目前の境界にて、白毫光、青蓮目、七重寶樹八功德池も悉く我が心地上に顯現す、然れども業感の强弱と福力の多少とに依りて現行する所の物同じからず、地獄の衆生は之を見て鑊湯爐炭となし、餓鬼界の者は之を見て聚膿積血となし、修羅は之を見て刀兵矛戟となし、凡人は之を見て娑婆穢土となし、諸天は之を見て瑠璃界となし、諸佛は之を見て常寂光となす、嗚呼眞なる哉、悟は美眠の如く、迷は噩夢の如し、榮枯得失は僅に一瞬の間なり若し迷悟を超越して大寂滅界に遊戯せば生死涅槃も猶ほ昨夢の如きのみ、之を本來成佛の消息となす

## 第十一　實參實究の事

予は去明治二十一年九月三十日、明教新誌二千四百三十四號の紙上に、臨濟門下同火の諸兄弟に望むと題して云ひしことあり、其言に云く

予が美濃の伊深や(これは自分が若き頃師家と頼みし伊深村正眼寺の專門道場特賜眞如妙覺禪師雪潭和尙の事なり)八十一、隣等の(同八十一隣村東禪寺專門道場特賜大圓正覺禪師蓬洲和尙の事なり)禪堂に居たりし時は常在百十三人にして、彼の外三とて、羽が生て飛ぶ樣な麥壹斗の中へ米三升宛を入て炊きたる麥粥を啜り、予も八九年勤めた頃は、その百十三人の內に、喚鐘を聞て老師へ獨參する者は僅に六七人あるのみ、他の百餘人は皆粥袋子の如く、謂ゆる沈香をも焚かず屁も放らず、左はあれど願心なきに非ず、日夜體究練磨するも、今此事を思へば眞の智慧を合點すること能はざるまでの事なり、今の世に於て世智辨聰の文彩ある妙說も、矢張眞の智より見れば皆枝葉の論にして譬へば鸚鵡に人の情なきが如く、懸河の辯を以て他を欺き、我れ宗敎に淡泊なりと、我が事を人の事の樣に思ひ居る人こそ哀れなる哉、我が心の眞金を

土塊の如くする也、抑も牟尼世尊の教法は唯一眞如の面目にして永劫至樂の大圓鏡あり、故に究むべきは此の大道なり、別して大智の人間は刹那も忽爾にすべからざるなり、是れ人文開明の極度に達するの法あるが故に、その極度に達するを悟りといふ、悟りとは本來不生不死の大智慧にして、朝より暮に至るまで見る底聞く底是なり、此の見聞覺知の外、別に本心ありと思ふべからず、見聞覺知其儘本心なりと思ふべからず、但直に本心を識得すれば、見聞一一本有の靈光とある、されは如何にして此の本心を識得せんか、是れ實參實究にあり、その實參實究とは如何なる事かといふに是れ坐禪なり、坐禪とは是れ靜慮なり、靜は止にして慮は觀なり、止は一切の煩惱妄想を靜め止むるの謂ひにして、觀は一切諸法の眞理を觀達するの謂ひなりとす、故に瑩山祖師曰く『三根坐禪、(說)萬行の中最勝の實行は唯坐禪の一門あり、僅に坐して一歩の功德を進むるときは、百千無量の堂塔を造るに勝れり、何に況や常に修して退くこと無けんをや、永く生死を解脫して自已の心佛を見ん、行住坐臥無作の妙用に非ずといふことなし、見聞覺知悉く是れ本有の靈光なり』と靈光なりと雖も、未だ坐禪修行の足らぬ人は靈光も亦靈光の用を爲さずして、心猿飛移る五欲の技、意馬馳走す六塵の境と云へるが如く賢愚等しく此に至りては極めて六ヶ敷ものなり、古賢女の歌に

麻絲の長し短かしむづかしや有無の二ッをいつかはなれん

と、されど此旨を了得せざれば全く生死輪廻を免れず、何となれは有無の二法に迷ふ之を生死と名くるが故なり、此の生死を離れて不生不死の大涅槃に至るの妙法は世に比類なき釋尊特得の法なるが故に、之を信服する者多からず、故に釋尊は涅槃の夕、その弟子衆に告て言く、我は良醫の病を知て藥を說くが如し、服すと服せざるとは醫の咎にあらず」と、誠に然り何程云ふても聞かせても、自已を顧みざる者は蛙面水鹿角蜂あり、縱令螢火の光り程でも眞箇佛心宗の旨を得る人は世塵の爲に

汚さるゝことなからん、又必ずや宗旨の爲に盡すことあるべし、然るを何ぞや門閥の尊大なるに阿り、金襴法衣に阿り、徒らに一宗の頽敗する、を顧みざる、眞の道人は少欲知足を專要とす、然るに一宗の知識と稱せらるゝ身にして無暗に金錢を貯蓄するは何ぞや、財寶は三世の寃なりと口には說けど其心に實なきは何ぞや、心に實なければ從前說去り說來りしは虛僞の山を爲して畵餅に屬す、畵餅の說法なれば、矢張その境界は凡夫にして、臨終には業の强き方に誘はれ三途の故里に還るのみ、予は日夜に思へらく、此の如く九年十年工夫を凝してさへも心王と顏々相對することを得ず、況や迷ひの上に迷ひを重ぬる世上の凡流に於てをや、同火の諸兄弟以て如何と爲す

予先年大阪朝日新聞記者の所論を讀みしことあり、其詞に曰く

古人云へるあり、已れ物なくして人に物を與んとするとも人承知すべからず、已れ安心を得ずして人に安心を獲得せよと勸むるも人肯ずべからず故に布敎を以て本分とする者は、自から大信心を發得して佛の大悲悲に感泣し、禁ずる能はざる涙を以て聽者の心內に灌灑して信種を萠動し信芽を生ぜしむべし、已が信ずる如く聽者を信ぜしめんと懇切に說くべし、一回して信せずんば兩回、兩回して信せずんば三回、聽者が泣て信ずるまで泣て說くべし

と、余は之を讀で感服に堪へず、さても我が臨濟門下六千餘の諸兄弟中如何に佛心宗は衰微するとも、永劫に亘りて不生不滅の活氣を螢火許りも見得し、達磨大師西來の佛心印を繼ぎ得る底の漢、多少有りや亦無しや若夫れ鐵漢あらば門閥の尊大や金襴の法衣に阿りて徒らに大道の衰微を傍觀せざるべし、然るに今時高僧と稱する者の中にも、或は上に阿諛し下に尊大に搆へ、中心虛僞を爲して說法敎化に從事する者あれど、畢竟是れ畵餅なり、畵餅なれば矢張凡夫にして、沒後には三途の人となるを免かれず乞ふ各自活佛を持するの老漢は、上智下愚に對して

懇切に人生の一大事たる單傳直指の大道を說きたまへかし

大阪朝日記者の眼は高くして親切なり、我が信ずる程泣て聽者を泣しめよとは大慈悲の言なり、然れども是れだゞ普通宗教の談議者に告るの言にして我が禪旨とは天淵月鼈なり、一佛成道して法界を觀見すれば草木國土悉皆成佛にて、一切衆生は皆是吾子なり、耶蘇も天主も我が腹中の一僕なるのみ、始知衆生本來成佛なり、生死涅槃は猶ほ昨夢の如し、天地法界山河國土草木叢林都盧是れ大圓覺なり、何ぞ泣くほどの悲みやある、下山の路は是れ上山の路、衆生を度せんと欲するに衆生なし、衆生あきが故に佛も亦無し、生佛あき所、之を眞の法性界といふ

## 第十二　禪學問答一則

▲客、あり問て曰く、禪を學で何の益ありや　○答て曰く、禪學は元來この天地萬物を以て直に自己とするの法にして無上最尊の學なりとす、故に自己も天地も本來生滅なし、心性元より不生不滅なり、如何にしてか山河大地を以て自己に歸せん、如何にしてか自己を以て山河大地に歸せしめん、試に自己を亡じて見よ、亡する所直に是れ物我同躰根境不二なり、不二なるが故に、心を拈するときは、大地に寸土あるなし、十方虛空悉皆消殞す、又山河大地を拈するときは三界無法何れの所にか心を求めん、只是れ山河大地のみ、承陽大師曰く、古人曰く若し人心を識得すれば大地に寸土なしと知るべし、心を識得する時、蓋天撲落し、面地裂破す、古德曰く、作麼生が是れ妙淨明心、山河大地、日月星辰、あきらかにしりぬ、心とは山河大地なり日月星辰なり」と、昔し瑯琊の慧覺和尙に敎家の講師問て云く、淸淨本然ならば云何ぞ忽ち山河大地を生ずと、和尙示して曰く、淸淨本然ならば云何ぞ忽ち山河大地を生するやと、問處と答處と同一舌なれども、問意と答意とは雲泥の相違あり、講師は山河大地

を以て有爲不淨の物とし、和尙は清淨本然なる山河大地豁聲山色なりと拈提す、大地有情同時成道の時何物か是れ法王身にあらざらん、故に楞嚴經に曰く、山河虛空大地は咸是れ妙明眞心中の物なりと、禪學者は此の三昧を得るが故に萬象の中に全身を露はし十方世界を以て一毛端に攝むることを得るなり

▲又問て曰く、物体の離散和合は免かれざるの數にして、如何に不生不滅といふと雖も、此法則を超過すべからず如何

○答て曰く、我が不生不滅といへるは離散和合なしといふに非ず、離合集散のまゝ不生不滅なりといふにあり、彼の張子すら言ひしに非ずや、集まるも亦吾躰散するも亦吾躰なり、死の不亡を知らば共に性を言ふ可し」と佛家の謂ゆる性とは眞如法性なり、法性は常住にして變異あることなし

▲又問て曰く、悟道とは如何なることなりや

○答て曰く、讀で字の如く道を悟るとなり、道とは何ぞや是れ心なり、心に迷ふ者之を凡夫といひ、心を悟る者之を佛といふ、昔し雲庵といへる人、朱顯謨世英といへる官人に答へし其文中に左の如きことあり

實の如くに自心を知れば究竟して本來成佛す、如實自在、如實安樂、如實解脫、如實清淨にして、而も日用に唯自心を用ふ、自心の變化把得して便ち用ひ、是非を問ふこと莫れ、心を擬して思量すれば已に不是也、心を擬せざれば一一天眞、一一明妙、一一蓮華の水に著かざるが如し、所以に自心に迷ふが故に衆生と作り、自心を悟るが故に成佛す、而して衆生即ち佛、佛即ち衆生、迷悟に由るが故に彼此あり、如今學者多く自心を信せず、自心を悟らず、自心の明妙なる受用を得ず、自心の安樂解脫を得ず、心外妄りに禪道ありとし、妄りに奇特を立て、妄りに取捨を生ず、縱ひ修行するとも、外道二乘禪寂斷見の境界に落つ（林間錄）

故に佛法の要は但悟道に在り、大事了畢といふも亦悟道に在り、悟道よ

り大事なるものなし、孔子すら尚ほ曰ふ、朝に道を聞て夕に死すとも可なりと、況んや道を悟るに於てをや、自己の心地を明むるに於てをや、我等は多生の間、幾度か徒らに生じ徒らに死す、今や幸に人間に生れ値ひ難き佛法に値ひぬ、されば諸佛賢聖の提携に依り、心地を發明することを得ば實に是れ万劫千生の一大事なり、一旦の悟道は盡未來際に通徹す、設ひ當處に死するも何の遺憾か之れあらん、若し夫れ心地を明めずして永く此世に在らんか、遺憾之れより大なるはなし、況んや空しく醉生夢死するに於てをや、古德曰く、若し人百歳生けらんも諸佛の機を會せざれば、未だ生れて一日にして能く之を決了せんには若かじと此の謂ひなり

▲又問て曰く、その謂ゆる悟りなるものは古人の如く一言下に大悟し得らるゝ事ありや

○答て曰く、何ぞ古人を問ふに及ばん、我れ廿一歳の十二月、臘八接心の夜、鷄鳴の頃忽然として悟入することを得たり、然れども大悟界の消息は文字を以て形容すべきにあらず、言辭を以て唱道すべきにあらず、人の水を飲で冷煖を自知するが如きのみ、古人云く悟り了れば未悟に同じと、然り我れ悟道せし時何の奇持もあるおし、只我が首に掛けし絡子の環の白きを見しのみ、今年六十餘に及ぶも亦同じきのみ、然れども悟道の歡喜は忘れんと欲して忘るべからず、忘るべからずと雖も、無始の習氣急に去る能はずして、十二時中正念相續の力足らず、平日動もすれば習氣再發して凡下に如同することの多きは、自ら省察して慚耻するのみ

▲又問て曰く、その習氣煩惱とは如何なるものなりや

○答て曰く、習氣とは前々生より、我が八識の心田地に附着し來れる煩惱障、業障、所知障等の餘習なり、此の餘習煩惱は母胎の中より帶び來るが故に、俱生の煩惱ともいへり、内に此の煩惱潛伏するが故に、外境に對

して分別の煩惱を誘起す、之を分別起の煩惱といふ、油に油を次ぎ、薪に薪を續ぐが如く、煩惱の上に煩惱を續足すが故にこの煩惱は無盡なり、無盡なれどもこの煩惱は菩提の種子あり、何とあれば煩惱は淤泥の如く、菩提は蓮華の如くにて、煩惱の淤泥なければ菩提の蓮華を生ずべからざるが故なり、蓋し淤泥と蓮華と一あるにはあらず、淤泥は淤泥にして蓮華にあらず、蓮華は蓮華にして淤泥にあらず、只蓮華を生ずるが爲に淤泥の必要あり、淤泥あければ蓮華を生ずべからざるが故なり、淤泥は蓮華にあらずと雖も蓮華は淤泥の幾分を含まざるにあらず、彼の糞穢は米麥にあらず、米麥は糞穢にあらずと雖も、米麥は糞穢の幾分を含まざるにあらず、然れば米麥が糞穢となり、糞穢が米麥となる如く、煩惱が菩提となり、菩提が煩惱となるといふも敢て不可なし、故に仁王般若經に云く、菩薩未だ成佛せざるときは菩提を以て煩惱と爲し、菩薩成佛するときは、煩惱を以て菩提と爲すと、謂ゆる菩提といふも煩惱といふも其實躰は是れ心なり、此心一念迷へば煩惱となり、一念悟れは菩提となる、只一念の轉所に依て或は菩提道心となり、煩惱妄心となるのみ、故に煩惱は佛の種子ありといふも可ならん、然るを無智の者は煩惱を除きて後、別に菩提といへる者を得ると思ひ迷心の外、別に眞心の本躰ありと思へり、是れ決して然らず、例へは澁柿の甘柿と變ずるが如く、煩惱が菩提と變じ、生死が涅槃と變じ、衆生が佛と變じ、凡夫が聖人と死じ、愚人が賢人と變ずるまでのことなり、故に煩惱即菩提、生死即涅槃、無明の實性即佛性、幻化の空身即法身、法身覺了すれば無一物、本源自性天眞佛といへり、是を以て煩惱に定相を止むべからざるなり

△あらくや虛空を家と住なして須彌を枕に獨寢の春

△雲晴れてのちの光とおもふらん元より空に有明の月

△問ふ、念佛と坐禪とは畢竟如何　▲答ふ、念佛も三昧なれば坐禪も亦三昧なり、故に禪の眞意を識得すれば、念佛三昧を發得す、又念佛三昧

に入る者は坐禪三昧を識得す、只坐禪は理佛と冥合せんことを欲し、念佛は智佛と冥合せんことを欲するの差あるのみ、されど理智本來不二あるがゆゑ、理佛に合一するも、智佛に合一するも、且く其の方法を異にするのみにて、結局は是れ一なり、之を主觀的に見るも、之を客觀的に見るも、元是れ一心の作用なるのみ、一心の作用なるがゆゑ、已心の彌陀あることを知れば、彌陀即ち是れ無量壽佛なり、佛は是れ覺の義、覺に本覺と始覺とあり、本覺は是れ理にして始覺は是れ智なり、この理と智とは本來不生不滅なるが故に無量壽佛なり、この無量壽佛は常に涅槃安樂の世界に住したまへり、我等凡夫が生死の苦海を出離して趣くべき所は彼の安樂世界也、念佛も坐禪も三昧なるが故に、心を一處に繫くものなりとす

觀無量壽經に曰く、佛、韋提希に告げたまはく、應當に心を專にして念を一處に繫ぐべしと、佛遺敎經に曰く、心を一處に制すれば、事として辨せずといふことなしと、彌陀經に曰く、名號を執持して一心不亂なれば大集經に曰く、法悟比丘は二万年の中、常に念佛を修して睡眠あることなし、貪瞋等を生ぜず、親屬衣食資身の具を念はずと、又念佛三昧經に曰く、舍利弗、二十年の中、常に勤めて毘婆舍那(種々觀察と翻す)を修習し、行住坐臥正念觀察して曾て動亂なしと、又無量壽經に曰く、至心に精進し、道を求めて止まざれば會ず當に尅果すへし、何の願か遂げざらんと、又文殊般若經に曰く、一行三昧とは、應に空閑に處して諸の亂意を捨て、心を實理に繫て一佛を想念すべし、念々相續して懈怠せざれば、一念の中に於て即ち能く十方の諸佛を見て、大辯才を獲んと、是等の經典に依て見るも坐禪と念佛とは同一理なることを知るに足る

洞上の古德祖鏡禪師の道歌に曰く△生れ來て祖鏡の二字は知らねども、梅の小枝に鶯の聲これ脫体現成せる禪の眞面目を吐露せられしもの

の阿彌陀經に、水鳥樹林念佛念法念僧とのたまひし旨と同一なり、一休

禪師の道歌に曰く△有りがたや我が本尊を開くれば森羅萬象彌陀の全体、又曰く△十方は唯の一心淨土なれ衆生もつとめ已身彌陀佛、又曰く△西方の本來空に往生し、無量壽佛となるぞめでたき、又曰く△阿彌陀佛悟れはすなはち去此不遠、迷へばはるか西こそあれ」と蓮如上人の歌に曰く△唱ふれは我も佛もなかりけり、南無や阿彌陀の聲のみぞして」と、これ平生往生不來迎と書貽したまへる文と同じきを見る、又見眞大師の歌に△程遠き南無阿彌陀佛の御國へもたゞ時の間に生れ行くらん」又△法の道聞くに心の定まれば、淨土は北やみんなみにもある」と遊行上人の歌に△一筋に南無阿彌陀佛と唱ふれば佛もわらず身もなかりけり」と是れらはみな生佛一如智境一枚の旨を詠まれしものなり又かの△法華經は八卷ばかりにかぎらめや松竹櫻當位即妙」といへるが如き、まことに禪教同体なり

△問ふ、當時貴顯の人にして禪學に熱心の者ありと聞く是なりや否や

▲答ふ、禪學は元來上智下愚を論せず、利人鈍者を撰まざるもの故、何人たりとも熱心に之を修せざるべからざる所以のものたり、されど禪學は專ら心膽を練磨する所の一行三昧なるが故、古來上根上智の人にして之を修する者多し、而も禪學は天地の大原理たる這の心性を識得して胸宇の結使を解き、無礙自在の快樂を得るに在り、有爲世間の狀態は我れ人共に死し去ること流星の飛ふが如く、四大分離して一物をも停めざるものなりと考ふれば淺薄なり、されど悉多太子生れて天上天下唯我獨尊なりとの玉ひしは這の心性を識得し玉ひければなり、吾人も亦心性を識得すれば皆唯我獨尊なり、唯我獨尊は悉多太子の高慢にあらず、一切衆生をして、個々唯我獨尊なることを知らしめんが爲の婆說なるのみ、然るに世人の多くは我が心性の尊貴なることを識らず、何を以てか萬物の靈長とやせん、世に神といふものあり、佛といふものあり

是れ四大を指すにあらず、肉團を指すにあらず、正しく是れ道の心性を指せるなり

釋迦阿彌陀地藏藥師と名はあれど同じ心のほとけなりけり

然るを何ぞや、別に怪しき個体の佛身佛躰在しますあらんと妄想する者少なからず、是に依てまた世に佛陀の三身を疑ひ異むものあり、是れ佛の何物たるを知らざるに由る、法身とは是れ心躰の義にあらずや、報身とは是れ心相の義にあらずや、身とは是れ心用の義にあらずや、一心の躰相用之を三身の佛陀となす、身といふと雖も是れ肉身にあらず、身は積聚を以て義となす、即ち眞理の積聚する所、之を法身といふ、妙智の積聚する所之を報身といふ、理智の冥合して應用無礙ある所之を應身といふ、故に我が臨濟大師は有る時、衆徒に示して曰く

儞か一念心上の清淨光は是れ儞が屋裏の法身佛なり……斷

儞が一念心上の無差別光は是れ儞が屋裏の報身佛あり……智

儞が一念心上の差別光は是れ儞が屋裏の化身佛なり……恩

又六祖大鑑禪師、衆徒に示して曰く

自の色身に於て清淨法身佛に歸依す、自の色身に於て圓滿報身佛に歸依す、自の色身に於て千百億化身佛に歸依す、善知識色身は是れ舍宅歸すと云ふべからず、三身佛は自性の中に在り、世人總て有すれども自心迷ふが爲に內性を見ず、外に三身の如來を覓め、自心の中に三身の佛あることを見ず、汝等說を聽け、汝等をして、自身の中に於て、自性に三身の佛あることを見せしめん、此の三身佛は自性より生ず

と實に然り、この三身我が自性の中に在ることを知らば是れ眞に唯我獨尊なり、世人此理を知らざるが故に一心の異名たる佛身を疑ふや悲しむべし

# 第十三　呂洞賓の一睡

昔し唐の會昌年中に呂洞賓といへる者あり、二度まで進士に擧げられけれども位階進まず、年已に六十四歳に及びける故に心甚だ樂まず、一日長安の酒舗に往いて遊びけるに、忽ち一人の道士來り、青き頭巾に白き袍を着けたり、其体凡庸あらず、時に呂洞賓其名を問へば、道士答へて曰く、吾は雲房といへる者にて、終南山の霍嶺に住めり、汝が相を見るに仙骨あり依て我に隨ひ仙道を樂まずやと、呂洞賓は此語を聞けども、心迷ひて答ふるに語なし、雲房時に酒舗の僕に命じて酒を温め來らしむ呂洞賓を招きて共に之を飲む、稍々醉を催しければ、雲房の曰く、酒已に足れりイザや飯を炊ぎて汝と共に喫せんとて自から飯を炊ぎける、呂洞賓は醉に堪へずして其の側に一睡を爲しけるに、忽ち唐帝の勅使來りて呂洞賓を呼起し、傳へて曰く、唐帝汝を召して官につかしめ給はんとあり、急ぎ王宮へ參内すべしと、伴ひて王宮に入りけるに、唐帝は呂洞賓をして郎署といへる官に即かしめ給へり、是より呂洞賓は王に事へて朝に在るに、萬事皆帝の御意に叶ひ、臺翰諫苑秘閣等の高官に昇進して權勢肩を比ぶる者なく、富貴の家の女を娶りて程なく一子を設け、三年の後又一女を産み、一門の繁昌すること王侯の如し賄賂の使者門前市を爲し、終に宰相の極官に進み富貴榮花心に任せ、國の政治を執る事十餘年、始め仕官せしより、年已に五十年を經て、一門親族も廣く、權勢極まりなし、然る處に呂洞賓が權威を妬む者ありて、帝に讒言しければ、忽ちに罪を蒙りて官位を剝れ、嶺表といへる遠島へ流罪となり、恩愛深き妻子等に離別して、互に歎き悲みながら詮方なく一門親族にも別れ、配所に在りて呻吟し、前日の富貴歡樂に引替へ今の憂苦に晝夜歎き暮し顔色も憔悴して世を恨み身をかこち寧ろ捨身して死せんものと決心し、海岸の巖上に登り、身を躍らして海中に飛込だりと思ひしかば、忽然

として夢醒め、我身は依然として長安の酒舗に在り、而して雲房は其の側に飯を炊き居れり、呂洞賓は忙然として呆れ果て四方を見廻す許りなり、時に雲房は呂洞賓に向ひ、汝今の一睡中の夢を知るや否や、富貴を得て樂むこと五十年、遂に流罪に遭て配所の一卒となる、榮枯唯一瞬の夢、世人の榮枯得失も亦夢の如きのみ、富貴を得るも喜ぶに足らず、之を失ふも亦憂ふるに足らず、依て我に隨ひ仙道を修して不老不死の眞道を樂めよと諫めければ、呂洞賓も始めて雲房の敎に隨ひ仙道を修して終南山の仙人となりしこと列仙傳に見えたり

大般若經に曰く、人身は無常なり、富貴は夢の如しと、眞に然らずや、又金剛般若經に曰く、一切有爲の法は、夢と幻と泡と影との如く、露の如く亦電の如し、應に是くの如きの觀を作すべしと、深く銘刻すべき也

## 第十四　槐安國物語

唐の淳于棼が家の南に老槐樹あり、棼、友人と其樹の下に酒を飲み、醉ひ臥してウト〳〵夢に入り來るに、忽ち黑衣を着たる人來りて曰く、我は槐安國王の使者なりけるが、君を迎へ奉るが爲に來れるなりと、棼、車に乘り使者と共に行き、槐樹の下に至り、洞門に入りけるに、大なる城あり其門傍に大槐安國と題書せり、一人の奏者出來る、駙馬遠來といふ、即ち棼を引て殿上に入る、白衣赤冠の王者出來りぬ、棼これに向て禮拜す、王の曰く、我に娘あり瑤芳といふ、君と夫婦たらしめんとて、數十人の女音樂を奏し、燭をとつて棼を導き金殿翠闕の中に入る、一人の女あり金枝公主と名く、その形容天人の如し、金枝公主は即ち瑤芳の事なり、禮を施し、契を脩め、情交日に厚し、或日王の曰く、我國の南柯郡、施政宜しからず君を其處の太守となすべしとて、即ち官人金玉錦をして供奉せしめ瑤芳も亦同道せり、行くに臨て其母瑤芳を誡めて曰く、淳于棼は活潑にして且つ酒を好めり、汝今夫婦たり、汝よく夫に聽順せよと、既にして南柯

郡に至る、人民奉迎すること、極めて鄭重なり、梵は郡政よろしきにより郡中能く治まる、其間二十年に及べり、王喜んで梵に定位を授く、五男二女を産み、榮華比ひなし此時瑤芳は病で死す、梵悲んで是を盤龍岡に葬る、時に國王及び其夫人も群臣を召し連れ、路衣の行儀を正し來りて吊ふ、斯くて人の申す仔細あり、梵を古郷に還すべしと、王此言に從ひ、梵を古郷に歸らしむ、別れに臨で曰く、汝が子の男女は我が爲に孫なり、養育教授に盡すべけれは決して心を痛むること勿れと、即ち二人の使者に命じて梵を本の洞門より出さしむ、忽然として夢は破れたり、頭を擡げて見れば童子箒を執て庭を拂ふあり、友人は榻上に座せり、日未だ暮れず、梵、友人と共に槐樹の本を尋ね見るに、一の蟻穴あり、其内廣くして人の出入に妨げなき程なり、而も其の槐洞は宮殿に似たり、數萬の蟻其中にあり、白羽赤頭の大蟻あり、是ぞ即ち槐安國王なり、外に亦一の穴あり、群蟻自から別れを爲す、是れ即ち南柯郡なり、又一堆の土あり、龍蛇の



形の如し、即ち盤龍岡なり、梵これを怪み、急に其穴を塞がしむ、其夜風雨俄に起る、天明に及で其處を見れば蟻皆行て跡方を止めず

是れ一場の夢物語なれども、人間の一生又此の如きものなるやも測り知るべからず、梵が一睡は彼れ蟻群の三十年五十年なるべきか、彼の四王天は人間の五十年を以て一晝夜と爲し、忉利天は人間の百年を以て一晝夜と爲し、夜摩天は人間の二百年を以て一晝夜と爲し、兜卒天は人間の四百年を以て一晝夜と爲し、化樂天は人間の八百年を以て一晝夜と爲し他化天は人間の千六百年を以て一晝夜と爲すといへり、然れば彼れ蟻群の如き小虫は、人間の一生を以て幾千万歳と爲すやも知るべからず、乞ふ五十年八十年を以て長しとすること勿れ無量時間の上よりこの人間を詠むるときは、人間の百年も南柯の一睡、槐安國裡の狀態なるも亦知るべからず、眞に是れ槐安國中一場の夢なりけり

# 第十五　韓明が自刎と貞成の生天

磁石は能く鐵を吸へども曲れる針を啜はす、琥珀は能く塵を吸へども腐れたる芥を取らず亦鳳は梧桐にあらざれば集らず、竹實にあらざれば喰はずと、斯る非情や鳥類に至るまで已を守りて邪正を擇ぶ況や人倫に於ては之に愧ざらん、渦して盗泉の水を飲まず、餓死するとも不義の粟を食はずとかや、無道の富貴且つ人倫に洩れたる人は死しても斃れても我さへ能くばといふ樣な人は、姿は人にして犬豚の肥たるが如きか

昔し韓明か妻、容色甚だ美なり、康王之を奪うて宮に納る、韓明大に恨むと聞て、王は韓明を捕へしめて之を戒む、韓明いよ〳〵怒て遂に自刎す彼の妻竊かに衣服を脆く製して之を首にし、王と共に高き臺に上り忽にして身を投ず、侍臣駭いて衣を掴り引上んとす、衣破れ臺下に墮て死す其帶を取て見れば、我が屍を韓明と同處に埋められんことを乞ふと書きたり、王甚だ怒りて別に埋葬せしむ、夫婦の塚相臨めり、幾程もなきに梓の木兩塚の上に生じ、根は下に交はり、枝は上に連なる、之を連理の木といふ、又鴛鴦あり其木に飛び來りて朝暮啼き哀しむ、時の人此鳥を韓明夫婦の化したるものならんと云ひあへり

余思へらく、夫婦の愛情は宜しく此の如くならざるべからず、妻としての貞操は此の如く堅固ならざるべからず、然れども佛法より之を見るときは妄りに精魂を弄して痴情を增すのみならず、その結果たる畜生道に墮して飛禽の身を受く最も哀むべきものあり

余が眞實を云はゞ、心は虛空なり、虛空は心なり、天地は心なり、心は天地なり、活きたる彌陀は心なり、心は活きたる彌陀なり、名は多けれども唯一物あり、然れども今時は吾人の糟粕を舐めて文字に拘泥せられ、彼の理此の理と當てつ比べつする者は、海濱の沙を算ふる昔しの德山和尚

の如し、此の德山宣鑑禪師は敕相家にして、蜀の國に在て金剛經を講ず、其の經中に千劫に佛の威儀を學び、萬劫に佛の細行を學で、而して後に成佛すと說き給ふを見て、今南方の禪魔子は即心即佛ありといふを聞き、遂に發憤して直に南方に向ひ、澧州の路上に至り、一婆子の油糍を賣るを見て、空腹を癒せんが爲に一休す、時に婆子問て曰く、上座が車中に載する所のものは何物ぞ、德山答へて曰く、此は是れ金剛經の疏抄なりと、婆子曰く我に一問あり、上座若し答へ得ば油糍を布施すべし、若し答へ得ずんば別處に買ひ去れと、德山曰く速に問ふべしと、時に婆子問て曰く、其の金剛經中に曰く、過去心不可得、現在心不可得、未來心不可得と、上座は即今この那箇心を以て空腹を癒せんと欲す、德山答ふること能はず、依て婆子に問うて曰く、此の近傍に何の宗師かある、婆子曰く、此の五里外に龍潭和尙ありと、德山尋ねて龍潭に至り、頗る體窮棘磨し、歲月を經て晝參夜參の後、適々一夜深更、故らに歸堂して臥床すべしと申されし故に、德山三拜して室を出つるに外面の暗き一物を辨ずるおし、却回して外面の黑暗なるを白す、龍潭遂に紙燭を點じて德山に度與す、德山此紙燭を接せんと欲するに及び、龍潭その紙燭を吹滅す、此時德山始めて大悟し、禮拜して退く、その翌日德山法堂前に於て、一炬火を以て唱へて曰く、今日まで多く諸の玄辯を窮めたるも一毫を太虛に致したるが如し、世の諸の樞機を竭すとも一滴を巨海に投ずるに似たりと云つて、その珍重し居たる從前の疏抄を悉く燒き、是に於て禮辭すと、方今昭代の餘澤、文士彬々として輩出し、其詩才を闘はしむるに、或は想ひを天地の外に馳せ、或は筆を人情の間に操る、縱橫百出、屈折自在、此等孰れも可とせんか、不可とせんか、歸する處は作家夢中の空想のみ、獨り命根歸着の大事に至りては、佛敎の眞理天外に出頭して全く無上の妙道なり、皆萬法唯心の說なり、萬法本一法なり、一より二を生じ、二より三を生ず、三より乃至万法を生ずるなり佛意は終始萬法を一法と見る、余は文字

に旨なれども、幼少より無常の觀念を起し、先師によつて趙州狗子無佛性の話、幷に百丈野狐の話抔を咬み破りたり、是れ全く虛無の會にあらず、無無の無にあらず、有有の有にもあらず、只是れ吾人の心源を明かにして安心立命ならしむるなり

又居士分燈錄に善慧大士の偈あり、玆に錄して參考の一助に供す

夜夜抱佛眠　朝朝還共起
纖毫不相離　如身影相似
起座鎭相隨　語默同居止
欲識佛去處　秪這語聲是

此の佛の去處は語聲是と、余は無去無來無生無死にして、吾人も一條無垢の全體なり、故に漢土天竺の四日市は云ふに及ばず、三千世界一として別處なく、活きたる阿彌陀佛なるが故に、今長崎の大砲も、濱の松吹風の音も悉く是れ彌陀の耳根に徹するものぞかし

昔し仁和年中の事なりけん、常州に飛鳥井貞成といへる人あり、其家富めり、此人佛敎の篤信者なりければ、寫字生若干を選び、金光明寺に於て百部の法華經を書す、斯くすること十回にして千部となりぬ、故に東大寺の延喜法師を屈請して供養を爲す、既にして貞成逝去す、其孫春澤の代になり、或時路邊の驛舍に宿泊す、其厩の中に駿馬あり、身に文を成して曰く飛鳥井貞成と有り〳〵と現はる、春澤之を見て大に驚き且つ此馬を買て歸宅の後、敬して之を貴ぶこと其生に事ふるが如し、一夕夢むらく、貞成の曰く、我れ宿債を償ふがため今此の驛馬となると、春澤夢中に問うて曰く千部妙經の功德力は無量廣大ならん、然るに何ぞ斯く哀れある身となり給ふぞやと、對へて曰く、我れ生平善事をも爲したれど亦要事をも造りたりその善惡の報別なるがゆゑ、今受るに惡報を先とす、然れども經王力を以ての故に、後ち必ず天に生せん、依て我が此の命は久しからずと、其後春澤は更に經王を書寫して貞成の追福を修す、其馬は十日許りにして自から厩中に斃れたりといふ

今の世に其例多し、是れ迄でも余が申すことは心を直く知るの道あり、

心は一切萬物の元にして、心さへ自知すれば生死の道も知れるあり、生死の道を自得すれば、本より心は天地と共に同體あることを了知せらるゝ也、天地と同體なる一心源を了知するは我が佛學の本基なりとす」併し余は生來不德にて、此の寒貧無祿の寺に小住し、此の如き無上の眞理を論じて無暗に不生不滅杯と竟見識を吐くを見て、某々等余を誹譏して曰く、渠が末後の一期を見るべしと、余思へらく、これは人々前々生よりの業緣に因るものにて、縱令心性を研究すれども、前報の酬は形体に依る者にして免かれ難し、故に余か今霜强盜の爲に刺れて死することあるや、其れまでの受合は出來ぬことなり、古德方さへ釋迦に提婆とか師子尊者、肇法師の王難、弘法大師に守敏法師の如き反對者も之あり、巖頭禪師の如き傑出の善知識ですら、賊の爲に斬られたまひ、玄沙禪師の如き有名なる高僧も、生涯癩病を憂ひたまひ、快川國師は信長の爲に焚れ、亦近く余が見聞する所に依るも、羅山和尚



は端坐して示寂し、卓洲和尚は赤痢の爲に訃れたまひしなり、是れ皆傑出の知識なれども亦此の如し、誰人も臨終の正念を願はぬはなけれど、前業は如何ともすること能はざらん、此義は墻外老師も申されし如く、何時天變地異の爲に斃れ、何時鬼神病魔の爲に殺され、何時兇漢毒手の爲に斬られ、何時横死の非命を遂げ、何時頓死卒倒することあるやも亦豫知すべからざる者なりと、之に依て百歳の壽も八十歳の壽命も、先づは得べからずと知るべし、唯この死すれに至りては世界を併呑する學者も、天地を顚覆する程の豪傑も、死の一字には泡の如く影の如くにして、一も跡を停むる者なし、獨り生れ獨り死して、惜むとも悲むとも爲方なし、唯是れ浮世は脆き露の命をたもちて、假りに親子夫婦兄弟、何れも假りの因緣にて、行末會者定離を免かれ難し、悲しい哉

蓋し萬法は唯一心より生じ、神も佛も天地萬象も悉く一心にて、此中

に元氣を呑み太虛を包むもの也、故に萬物の根源たる心を證得せざれば、縱令萬卷の書を縱に讀み横に諳んずるも決して安心立命の地に到らず、故に古來の祖師高僧が坐禪念佛題目陀羅尼抔を短く縮めて一心不亂に唱へさせたるものは、畢竟此本心を證得せしめんとの公案に過ぎず、仍て安心立命を得んと欲する賢人君子は無我無念の三昧に入て有無の名相を離れ一片無味の境界に到着す、金剛般若經に曰く、應無所住而生其心と、無所住の心は是れ般若なり、有所住の心は是れ妄心なり、此の妄心は幻煙の如く湯氣の如きものにて捕捉すべからざるものなり、然るに無所住にして生ずる所の心念は即ち唯心法界の音聲なるが故、之を常念觀世音と云ふ、眞に生死起滅の妄心を截斷せんと欲するものは、出息入息此音聲に成り切らざる可らず此音聲たる純一無雜にして是非得喪の分別にあらず、思慮分別は終日勞して毫も益なし、縱令千章を解し得るも算砂の人なるのみ、惜むべく惜むべし、知らずんばあるべからず

語を寄す四海の禪流、急に生死を解脫して自己の心佛に見ねんとならば行住臥坐無我無念の三昧に入て刹那も餘念に涉らず、此三昧力を以て紛々擾々たる此心を摺り潰して見よ、必ずや囚地一聲の歡喜地に入りて自性天眞の活佛に撞着することあらん、之を安心立命と云ふ

金剛經に曰く「若以色見我、以音聲求我、是人行邪道、不能見如來」と此は是れ敎主釋尊大慈悲を以て、天眞の活如來を見得せしめんとの捷徑なりと、千差万別の法門あるも、若し坐禪の正門を知らざれば、徒らに勞して一生の人身を過すもの歟、只此正法眼を具すれば、八万の法藏も一時に打開せられん、之を圓通無礙の修證ともいふ、我國に百觀音を安置せしは、世の音聲に即して出世無漏の妙音を聞かしめんとなり

無邊風月眼中眼　不盡乾坤燈外燈

柳暗花明十萬戶　敲門處處有人響

唯心禪話（畢）

附録

# 臨済大師 四料揀講話

墻外道人　高田道見講述

## 序言

此の四料揀と申すことは臨済宗の高祖慧照大師が或時随徒の者に示された文句で、その文句が四句になつてある、夫れを後世の者が假りに臨済の四料揀と名を附けたのであります、料はハカルと訓み、揀はエラムと訓むのて揀の字を簡の字に書くこともある、ソコで彼の人の料簡は善いとか惡いとか申す、故に四料揀の料揀も、人々の精神上の料簡も同じ事ぢや、只少し異なる所は世法と佛法との差ひである、世法が其儘の佛法、佛法が其儘の世法ではあるけれども、世法の料簡といふは多く有形に就てのこと、佛法の料揀といふは無形に就てのこと、世法の料簡

といふは善惡のこと、佛法の料揀といふは迷悟のこと、善惡といふときは淺い料簡であるが、迷悟といふときは勿々深い料揀であります、世法に於ても隨分料簡差ひはあるものですが、佛法に於ても勿々以て料揀差ひが多くある善惡の料簡は大抵目先のことであるが、迷悟の料揀は心内のことであるから、能々料揀しなければならぬ事であります、さて其の四料揀とはドンな事柄であるかといふに、其は臨濟門下に於て金科玉條として居りまする所の『臨濟錄』といふ書物の中にあるのですから、今その本文を左に掲げて御覽に入れませう(原漢文)

師(臨濟慧照大師を指す)晚參(晚方の說法を晚參と申すのである)衆ニ示シテ云ク、有時ハ奪人不奪境、存時ハ奪境不奪人、有時ハ人境俱奪、有時ハ人境俱不奪ト、時ニ僧有リ問フ、如何カ是レ奪人不奪境、師云ク照日發生シテ地ニ鋪クノ錦、瓔孩髮ヲ垂レテ白キコト絲ノ如シ、僧云ク如何カ是レ奪境不奪人、師云ク王令已ニ行ハレ[illegible]ニ偏シ、將軍塞外ニ煙塵ヲ絕ス、僧云ク如何カ是レ人境兩俱奪、師云ク并汾絕信獨處一方、僧云ク如何カ是レ人境俱不奪、師云ク王賓殿ニ登レハ野老謳歌ス



是れはほんの只讀み下したまでのことで、諸君が御覽になつても御聽きになつても、何の事だか颯波離お分りになるまいかと思はれます、依て之を諸君にも分るやうにお話し申して見たいと思ふのでありますが、併しながら之を在家初心の方々にも分るやうにお話し申すといふことは甚だ以て困難の至りである、その困難なるものを容易に分らせやうといふのが私の願ひである、何故かといふに今時世の諸大家が說法せらるゝのを聽聞するに、大抵は皆玄關先の話しで室内堂奥の話しは迚も在家止住の凡夫に分るものでないとて棚に揚げらるゝやうですが、夫れでは慳貪になつて、在家の人々に佛法眞實の妙味を施す時節がなからうと思ひます出家のことならば佛法を研究するのが專門であ

るから、種々の佛學をする中に斯樣なことも自然と分ッて來るのですけれども、在家の人ては其の餘地がないから、一句一偈に就て之を紛微塵に碎かなければ、グッと呑込むことが出來ませぬ、又博學多聞は望む所であるけれど、其は專門家の爲す所で、在家の人々には迚も叶はぬことであるから、簡潔にして意味深長なることを聞き、而して佛法の眞意と修行の要路とを踐まなければなりませぬ、左樣するには此の四料揀を見たやうなものに就てた話しするのが、聽き取りよいであらうかと思ひます、佛法の大海漸く入れば漸く深しとは申すものゝ、その大海に乘り出す船には磁石がなくては東西が分りませぬ、磁石なしに無暗と乘出しては、骨が折れる許りで、其の目的とする場處へ到着することが出來ぬやうなもので、敎海には是非その指針がなくてはありませぬ今この四料揀は敎海の指針にして心海の磁石であります、この磁石を心頭に懸けて進行するときは、時々刻々その目的地の近くなることが分



ッて來るから、甚だ愉快であります、流石はドウも臨濟大師ぢや、晩參の一言下に於て心地修行の一大方針を示され、一代時敎の皮肉骨髓を說き盡されてある、誠に今日の我々は大恩の有難さに感泣致します

私は臨濟門下の出身でないから、充分には研究が行屆いて居りませぬけれども、私は只私だけの擇法眼を以て、この公案を捌いて見やう、解釋して御覽に入れやうと思ふのであります、全体彼の臨濟門下に於ては餘りこの公案を微細に說くことを好まぬ樣子でありますけれど、古語にも有る如く舌大千を覆うて語言三昧に入り、終日說いて口に過なしで、言舌の及ぶ所思慮の通ずる所までは、之を說いたからとて、別に差支はない考へであります、無論祖師の言句を解釋してはならぬといふ掟もありませぬから、縱からも說き、横からも辨ずるのが、法門の宣揚であります、說くべきを說き辨ずべきを辨じ、而して說くべからず辨ずべからざる所に至らば、その先は自から觀念工夫して自から其の冷暖を知

るより外はありませぬ、去りながら此の四料揀を縱横無盡に辨じやうとしたならば、勿々十席や二十席にて終るべきことでありませぬから今は只千万分の一分だけを辨じ、それから後は諸君の御研究に讓ることに致しませう



## 第一　奪人不奪境

千載の今日に於て私が四料揀の講話を諸君の前になすといふことは如何に臨濟大師でも豫想外のことであらうと思ひます、定めし草葉の蔭からお歎き遊ばすであらうけれど、昔しと今とは人の根機が違ふのみならず、門外有緣の人々にまで佛法の堂奥を打開いてた目に懸けねばならぬ時節になつたのであるから仕方がない、門外の諸君にも話し、するには文字の講釋からして係らなくてはならぬ、否な慧照大師の示さるゝ言葉からして穿鑿し吟味しなければならぬ、實に廻り遠いけれど、急げば廻れといふやうなもので、早分りに分かちさうとするには、ドウしても廻り遠く廻らなくては、その意味に通達することが出來ませぬ、さて人とは人間といふことであらうか、境とは境内といふことであらうか、其んなことではない

人とはマア早くいへば手前といふこと、境とはマア向ふといふことぢや、其の手前とは己れといふこと、我れといふこと、自分といふことその自分、我れ、己れといへば、此の身躰であるかといふにマサカ左樣でもない併し此の身躰も自分の物といへばいふものゝ其實は假物で實物ではない、假物は借物であるから、借用期限が來れば何時でも忌や厭うなしに返却致さなくてはならぬ、故に我物ではない、呼吸の通はぬやうになると同時に四大五行に返して仕舞ふのである、四大とは地水火風五行とは、木火土金水ぢや、この借物を四大五行に返して仕舞へば我が身躰といふものがない身躰がなくなれば人とは云はれぬ、人といふの

は其實四大五行の事ではない、故に人といふも、我といふも、己といふも心の事である、心にも色々な心がある、平等の心もあれば差別の心もあり、本心もあれば妄心もある、凡夫が通常我が心と思ふて居る所のものは緣心分別の心である、緣心とは向ふの緣に依て起る所の分別心である、凡夫の分別心といふは善惡對待のもので夢の如く、幻の如く泡の如く影の如く、電の如く露の如きもので實に有爲轉變のものである、この心は時々轉變して常住ならぬドのやうに轉變するかといふに、順境に逢へば善となり逆境に逢へば惡となる之を緣慮心とも申します今は緣慮心のことを人と申したので、この緣慮心が緣とする所の物を境と申したのぢや、ソコで能緣の心、所緣の境といへば分り易い、能とは自のこと、所とは他のこと、この能所對待のことを人境とも、智境とも、心境とも、物我とも、我法とも、自他とも申すので、この能所對待の上に善惡是非得失邪正迷悟有無一異凡聖といふ差別を生じて來るのである、眼耳鼻



舌身意の六根を能と爲し、色聲香味觸法の六境を所と爲す、この六根と六境とを合せて十二處といふ、才二處の間に六識といふ分別が起る、是れで三六の十八界となる、この十八界は妄法なるが之を縮少するときは只人境の二ッとなる、その二ッの中にて、奪人と申して、人を奪ひ取て仕舞へば、不奪境とて、境の獨立となる、人境の二ッが相對するものぢやに依て種々の罪過を生ずるなれど、人我見といふ我執分別の病心を奪ひ取てさへ仕舞へば、萬境萬緣のみの獨り立となるから罪過の生じやうはない、罪過の根本となるものは、己我〳〵といへる人我見があるからのこと、執とはこの借物を何處〳〵までも我物と思うて返すまいとする慾張根性である、この慾張根性から、貪瞋痴の三毒も、財色食名睡の五欲も色聲香味觸法の六塵も皆これから起ッて來るので、この人我見は一切惡業煩惱の根本である、この根倒しをして一念不生の本位に還るを無我と申すのである、無念といふも無我のこと、無想といふも無我

のこと、無心といふも無物といふも無我の義である、不生と云ひ不滅と云ふも亦無我の義である、無我を無爲と云ひ、無爲を寂滅と云ひ、寂滅を一心と云ひ、一心の寂靜無爲なるを涅槃と云ひ涅槃の不生不滅不增不滅なるを大安樂といふ、この安樂なる寂滅無爲の本位を名けて淨土とも極樂とも眞如法性とも、蓮華藏世界とも申すのである、土に約するが故に淨土とも安養とも極樂世界とも名け、身に約するが故に、法性身とも、毘遮盧那佛とも法界藏身の阿彌陀佛とも名るのである、之が即ち奪人不奪境である、サアこの奪人無我の境に入れば最早無明煩惱の音沙汰もなく、已れといふ一物もなくなり、歷劫坦然トシテ變色無ク、呼テ心印ト爲スモ早く虛言といふ場合になる、大智禪師といふた方がこの奪人不奪境といふを

玉簫聲斷月明中。古殿深沈侍立空。門外春光閑不得。青旗吹動柳絲風。

と頌せられた、玉簫とは美しい樂器である、その樂器を調べた人も睡り込んだか、又は他に去たか、うの姿もなくなり、簫の笛の聲も斷へ果てた八月十五夜の三更とも覺しき頃、皎々たる明月のみさへ渉つてある、その古殿は空王佛の古殿にて、如何にも深沈と靜まり、侍立排班せる近從の者もなくなつて居る、されど門外の春光は閑と靜かならぬ、旗のやうになつてある青柳は風の爲に吹き動かされてある、その侍立空しゝとは奪人青旗の吹き動かさるゝは不奪境である、今はその如く人々お互ひも甚大久遠の昔しより、此の古殿の內に安坐して居るのであるぞといふことに氣が附いて見れば、我相も起らず人相も起らぬ、我相人相が寂滅したからには六根門外に於て、長短黑白迷悟凡聖の音沙汰やら、利哀毀譽稱譏苦樂の八風が吹かうとも、そは空吹く風と見流し、吹くがまゝ動くがまゝに任せて置く、ソコで山姥の謠にある如く

一念化生の鬼となりて目前に來れども、邪正一如と見るときは色即

是空その儘に、佛法あれは世法あり、煩惱あれは菩提あり、佛あれは衆生あり、衆生あれは山姥もあり、柳は綠、花は紅なり

とこれが不奪境の樣子であります、禪宗の四祖道信禪師が、牛頭山の法融和尙に向ひ「境緣好醜無シ、好醜ハ心ヨリ起ル、心若シ强テ名ケズンバ妄情何ニ從テカ起ラン、妄情既ニ起ラズンバ眞心ノ遍知スルニ任ス、汝但心ニ隨テ自在ナラバ復對治スルコト無シ、即チ常住法身ト名ク變易有ルコト無シ」と示されたことがある、我心といふものが手前の方にあればこそ好醜もあり、順逆もあり、善惡迷悟もあれど、我心さへなければ好醜順逆の心は起らぬ、うの妄心妄情が起らぬから、眞心が万物を遍照する又大乘起信論に「心生すれば種々の法生じ、心滅すれば種々の法滅すとあるこの心は妄心である、妄心が生すれば妄法が生する、妄心か滅すれば妄法も滅する、譬ひあれとも有りのまゝの有り潰れとなる

さて其の妄心をばドウして對治したものであらうか、そは四祖の申されし如く、心若し强て名けずんは妄情何に依てか起らんで、我が心に强て態々分別を生ずるものぢやに依て善惡好醜となり、凡佛迷悟となる故にその妄情分別の起らぬやうにするには非思量の所に安住せよと敎へてある、三祖大師の信心銘に「虛明自照心力ヲ勞セザレ、非思量ノ處識情測リ難シ、眞如法界ニハ他無ク自無シ、急ニ相應セント要セハ但タ不二ナルヲ謂へ、不二ナレバ皆同シ、包容セスト云フコト無シ」との非思量といふは佛境界にして凡夫の境界ではない、この佛境界に安心立命して居れは、一向に六識門頭に浮沈出沒して居る所の分別妄想は邪魔にならぬ邪魔にならぬのみならず、自己本心の大智慧光明の中にその分別妄想の惡凡夫を包容し攝取するから、分別も亦意に非ず、妄想の自性も亦不可得となつて除くべき分別もなければ、拂ふべきの妄想も無くなる、之を觀無量壽經には光明遍照十方世界念佛衆生攝衆不捨と說かれたので、十方世界ぢやの念佛衆生ぢやのとあればとて、心外の事で

はあい、光明遍照もその通り心外の事てはない、之を證道歌には、妄想ヲ除カズ眞ヲモ求メズ、無明ノ實性即佛性、幻化ノ空身即法身」と述べられてある、縱ひ眞如でも求めやうとすれば分別となり、妄想も除かうとすれば病となる、求むる念慮も起さす除く分別も起さぬ所で始めて眞如法界の一心源に歸入したので、之を萬法歸一、色即是空の當躰とも申すのであります、此の無我相無人相の當躰に歸家穩坐するのが奪人不奪境である

臨濟大師僧の問ひに答へられた、煦日發生鋪地錦とは不奪境のことぢや煦日は春日のこと、その暖かなる煦日が發生すれば、大地に錦を鋪いたやうに千紫萬紅得も得られぬほど立派である、之を形容して云ふときは七寶莊嚴の淨土と申しても宜い○染め出す人は無けれど春來れば柳は綠り花は紅ゐ」之を本地の風光とも、物外の春色とも申すのである、次に嬰孩垂髮白如絲とは、生れて三四歳までは嬰孩といふので、マア赤子といふ事ぢや儒の教の中にも「君子は赤子の心を失はす」と云ひ、「七十にして意の欲する所に隨うて矩を踰へす」と云へるが如く、古稀にもなれる白髮の老翁や、三四歳までの赤子は自づと無我相無人相である、今は三歳の童子が八十の翁媼の如く、八十の翁媼が三歳の童子の如しといふ意味で、奪人と申したからとて、全然無人といふのではない、有人あれども我執がないから無人の如くである、之を五蘊皆空の境界とも、身心脫落の當躰とも、無上大涅槃圓明常寂照とも申すので、厭離穢土欣求淨土といふも亦この奪人不境奪に外なりませぬ、凡夫の自力根性を打捨てゝ彌陀同躰の蓮華藏界に入るといふも亦この奪人不奪境の一句に說破せられてあるかと伺はれます、なんとマア一句に萬句を呑盡せられし獅子吼無畏の說法ではありませぬか、臨濟大師ならでは斯くも廣大深妙なことは云はれませぬ、文字法師の夢にだも知らざる格外過量の高論卓說であります

## 第二　奪境不奪人

前句の奪人不奪境は心空境有とでも申して宜からう、今この奪境不奪人は境空心有とでも申すべきである、その心空といふは人空のこと、人空とは我空のこと、我空は即ち奪人である、奪人は即ち無我相無人相である、小乘教に於て無我觀智を修し、我空眞如を證得するといふも奪人のことである、而して灰身滅智の無餘涅槃といふは人無我に入ることである、全体この人我といふは何の事であらうか、皆様よく考へて御覽あるが宜い、我れ〳〵お互ひには眼識、耳識、鼻識、舌識、身識、意識の六識がある、その意識のことを第六意識といふ、これは第六番目の數に當ッて居るからのことです、故に眼識から身識までを前五識といふ、この前五識には知覺のみ有ッて分別はない、眼識は五色を見るだけのこと、耳識は音聲を聞くだけのこと、乃至身識は寒暖等を知るまでのことで善惡の分別はない、善惡の第六意識の作用である、この第六意識には善惡無記の三性を具して居るので、その無記性といふは善にも惡にも屬せぬところのボンヤリとした心である、ソコで人間も幼少の時は無記心であるから、彼の兒童が何心なく、只口に任せて馬鹿〳〵と云ひ阿房〳〵といふ其言葉には過がない過がないから立腹する者もない、又結構惠來と云ったからとて、無意識であるから、夫を聞いて喜ぶ者もない、それは未だ無記性にて善惡の分別がないからのことです、然るに夫れ○生れ子が次第〳〵に智惠つきて佛に遠くるなるかかなしき』といふやうに段々分別が生じて來るに從ひ、凡夫の習ひとして兎角善き分別の方が勝を占めて來る、之を妄想分別といふ、この妄想分別を名けて人我と申したのである

この人我を我が心と思ひ已れと思うて居るのが凡夫の常である、りの妄分別の緣慮心が人間の本心であると思ひ、我であると思ふから之を

我見人見と申したものぢや、ソコで長沙和尚が「學道の人眞を知らざるとは從前の識神を認むるが爲めなり、無量劫來生死の本、痴人は喚で本來人と爲す」といふ偈を示されたことがある、從前の識神とは謂ゆる其の妄分別のことで、この妄分別は、緣に依て起る所のものであるから影法師の如きものである、愚痴の人はこの影像を認めて本來人、即ち之が眞如佛性であるぞと思うから六道輪回の根本となるとのことである

この妄分別は今世新に生じたのではなく、生れながら其性に具へて居るのであるから、年頃になるとドンな者でも必ず愛欲の心が起る、愛欲心の盛んになつたのを貪愛とも貪欲ともいふ、これは誰れ敎へずとも獨り手に內から發して來るのであるから之を俱生の煩惱と申したものである、この煩惱心より分別を起して種々の理窟を考へ出す、之を分別起の煩惱といふ俱生の煩惱といふは身に就て起る所のもの、分別起の煩惱といふは心に依て起る所のものにて、俱に之を我執人執と申したものぢや、この人我見を脫せずして佛性を論ずれは妄想佛性となり眞如法性を談ずるも亦意識分別の範圍を出づることが出來ぬ、例へは青眼鏡を懸けて萬物を見れは、萬物が悉く青色に見えるやうなものである、故に佛法修行は先づ最初にこの色眼鏡を外さなくてはならぬ、之を外さなくては迚も諸法の眞實相を見ることはならぬ、故に修行の要は只凡情を盡して別に聖解なしと申して、凡情の我執をさへ盡せは先づ夫れで修行の一段落が着いたといふものである、この我執煩惱を盡して無我になつたのが奪人不奪境である、諸惡莫作衆善奉行自淨其意といふも其實は無我の境に入るのである、去りあがら言ふことは言ひ易いけれど勿々以てこの無我には成り難い、道林禪師が白樂天に答へて三歲の童兒も言ふことは易けれど、八十の老翁も行ふことは難いと申されたが實に左樣であります、又洞山大師が、一丈を說き得んよりも一尺を行取せんには如かじと言はれたのも其れが爲めである、これは

何も昔しの人の話しではない、我々お互ひもその通り、勿々この人無我は容易に得られませぬ、拙者も最早三十年來この佛道を修行して居りますけれど、勿々以て我空眞如の境界には到られませぬ、只僅かに敎相の文句を覺えて法藥の能書をた話し申すまでの事です、併し眞にこの人無我を得れば羅漢の果に至り三明六通八解脫を得るのですから容易ならぬ譯ぢや、容易ならぬ譯ではあるけれども、佛祖單傳の玉三昧に入るときは、直下にこの人無我を得られる、人我の迷雲が破れると眞如の明月を拜むことが出來る、拜まれはするけれどまあ三日月の如きもので、ホンのチラリと見るまでの事ぢや、之を禪宗では見性悟道といひ淨土門では信心獲得といふので、陀彌の來迎といふも一念歡喜の時節である、彼の明月は此の大地より千萬里外の天上にあれど浮雲が散じて器の水が清ければ、彈指の間に其の月影が器の中に現ずるが如く、彌陀如來は十萬億土の西方にあれども、人我の自力を振り捨つるときは一念一彈指の間に三尊の來迎がある、來迎と申したからとて心外より他物の來り迎へるのではない、心水が清むと同時に菩提の影が其中に顯現するので、之を塵を拂ッて佛を見るとも、深く禪定に入て十方佛を見るとも申したので「一月普く一切の水に現ず、一切の水月一月に攝す、諸佛の法身我が性に入り我が性還て如來と合す」とも申すのであります、サア斯うなつて來る、モウ人我といふものは一微塵許りもない、此時無始劫來の人我はどうなつたのであらうか、淨土門の言葉でいへば彌陀の光明に包まれて凡身が其儘佛身とかつたので、東坡居士の謂ゆる「生滅々盡する處、即ち我と佛と同じ」といふ所ぢや、聖道門の方面でいへば、眞如本覺の光明に照されて、煩惱が其儘菩提となり、生死が其儘涅槃となつたので道元禪師の謂ゆる「身心自然に脫落して本來の面目現前す」と云はれた所である、此時には心佛及衆生是三無差別で自他の差別はありませぬ、

是の如く奪人を究竟するときは、衆生本有の心源、諸佛所證の聖境一枚となる、已に自性清淨の心源に溯り、諸佛所證の聖境に入るときは、自己一枚の光明となるが故にモウ我に對する境といふものが無くなる、之を奪境不奪人と申されたのである、境が無くなれば人の獨立となる、此時の人は謂ゆる人我の人ではなく、盡十方世界眞實人體の人であるから、此の人は唯我獨尊である、古語に「若し人心を識得すれば大地に寸土無し」といふことがある、そは何故であるかといふに、法界唯心の何物たることを識れば大地山河盡虛空盡法界が悉く唯心の所現にして心外無法であるからのこと、已に唯一心なれば一心の外に餘物がない、三祖鑑智大師が、圓同大虛無欠無餘と申されたのも此義である、圓覺經に神通大光明藏三昧と云ひ華嚴經に毘盧遮那藏三昧と云ひ、法華經に無量義處三昧と云ひ、大般若經に等持王三昧と云ひ、涅槃經に佛性三昧と云ひ、大乘起信論には大智慧光明遍照法界と云ひ、洞山大師は寶鏡三昧と云ひ、眞歇禪師は自受用三昧と云ひ、達磨大師の凝住壁觀、無自無他、凡聖等一と云はれ、二祖大師の了了常知と云はれ、三祖大師の虛明自照不勞心力と云はれたのも、皆この奪境不奪人の王三昧にして、禪宗の坐禪と云ふは、此の王三昧に住するのであります、この王三昧は善惡無記の三性を超越し、八識賴耶の闇窟裡をも超脫し、九識淸淨の佛界非思量に安坐するのですから、その六識門頭に浮沈出沒せる天魔外道は申すに及ばず、我見人見等は面出しをすることも出來ませぬ、何となれば積年の闇室に一燈を點じて、その闇黑が無くなつたやうなもので、無明黑闇の所在が全く無くなつたからである

尙又廣くこの光明のことを話し申せば、華嚴經十一の光明覺品には「爾時に光明、百千世界を過て徧く東方の百萬世界、南西北方四惟上下を照すも亦復是の如し、彼の一一の世界の中、皆百億の閻浮提、乃至百億の色究竟天ありて、其中の所有は悉く皆明かに現ず」とある、これは心光明

の廣大無邊なることを說かせられたのであります、又法華經に「爾時に佛、眉間の白毫相の光を放ッて、東方萬八千の世界を照したまひて周遍せざることなし、下は阿鼻地獄に至り、上は阿迦尼吒天(色究竟天のこと)に至るとある、これは敢て釋迦佛ばかりではない、この三昧王三昧に住するときは我々も亦その通りて、盡十方世界が自己の光明一片となる」故に張拙秀才は「光明寂照遍河沙、凡聖含靈共我家」と頌したみな同意であります、又長沙禪師が衆に示して「盡十方界是れ沙門の眼、盡十方界是れ沙門家常の語、盡十方界是れ沙門の全身、盡十方界是れ自己の光明盡十方界、一人として是れ自己にあらずといふこと無し」と申された、實に愉快なことではありませぬか、觀無量壽經に「光明遍照、十方世界、念佛衆生、攝取不捨」とあるのも素より他佛の光明ではない、梵網經に「光光は青黃赤白黑に非す、色に非す、心に非す、有に非す、無に非す、因果の法に非す、是れ諸佛の本源、行菩薩道の根本、是れ大衆諸佛子の根本なり」とあるのも亦この玲瓏たる一戒光明である、又神贊禪師が「靈光獨り耀いて迥かに根塵を脫す、體露眞常、文字に拘はらず、心性無染、本自から圓成、但だ妄緣を離れば即ち如如佛なり」と述べられたのも亦通身の光明、遍身の光明である、已にこの通身法界が光明であるから「通身無影像、遍界不覆藏」と古德も仰せられてある、法華經に「佛子住此地、即是佛受用常在於其中、經行若坐臥」とある、その此地とは光明世界のことで、朝より暮に至るまで、此の光明裡に在るときは一々佛の受用となり、行住坐臥も亦佛の作用となる、蓋天蓋地かみな此の大光明藏であるから、常に此中に在るときは、此身が佛子にして、此世界が寂光無二の淨土である、これが即ち奪境不奪人である、禪宗の坐禪は最初より此の大光明藏に入るのであるから、別に我執を對治するの造作はない、若し種々の分別を生じて古人の公案を考へたり、文句を穿鑿したりするやうなことをすれは却て此の光明を埋却して仕舞やうになるから、何でも此の光明を味まさぬや

うに油を注いで行かねはならぬ、油を注くとは、行住坐臥この定力を失はぬやうに、放心せぬやうに修行するのであります、ソコで

臨済大師が第二句の問ひに答へて「王令已ニ行ハレテ天下ニ徧シ、將軍塞外ニ煙塵ヲ絶ス」と申された、是れはドウいふ事であるかといふに

雪竇禪師の洞庭後錄といへる書物の中には「寰中天子塞外將軍」とあり、又從容錄の四十四則には「寰中天子塞外將軍」とあり同書六十八則には、「寰中天子、勅闔外、將軍、令」とあつて、その故事は史記幷びに前漢書馮唐が傳に見えてある、是れは支那上古の制にて寰中は天子の直轄、寰外は將軍の所轄といふわけ、闔内闔外といふも同じこと、之を昔の日本でいへは五畿内が寰中、七道(今は八道となつてある)が塞外の諸國に當る、昔は天子と諸侯といふ差別が有ッて、その治むる區域が二樣になつて居た、併し王令も嚴に行はれ、將令も密に布かれて謀反の煙塵を起すことも



なく、天下は誠に太平無事であるとのこと、是れは且く文字上の解釋である

その宗意は國王が詔勅及び法律を布いて天下を太平に治むるが如く佛祖單傳の王三昧に安坐し、日月の明に超えたる大智慧の光明を放ッて無盡法界を遍照するが故に、六識門内の寰中も、六識門外の塞外も誠に無事太平にして、分別俱生や我見人見の四民までが悉く王化に服して君が代を歌うて居る、夫れといふのも心王陛下が賢明に在しますからの事であります、大智禪師が「閻浮八萬四千城、干戈ヲ動ゼス太平ヲ致ス」と云はれたのも此意に外ありませぬ、我々の心内には八萬四千の塵勞煩惱がある、之を對治するに三學(戒定慧)六度(檀戒忍進禪慧)の干戈を動かさなくても、結跏趺坐の三昧王三昧に住するときは、眼界より乃至意識界に至るまで毫末許りも不平を鳴らすところの衆生がない、之を一佛成道觀見法界草木國土悉皆成佛とも有情非情同時成道とも申す

のであります

斯樣な譯ですから大乘佛教の極意を研究おさらうとするには、一切の萬法を悉く此の主觀的自心自性に歸納して御覽にならなければ、何の得る所もありませぬ、若れ自心自性の外に佛があり淨土があると思ふのは皆迷ひである、之が奪境不奪人の的意であります

## 第三　人境兩俱奪

サア今度は人境俱奪の法門に入るのですが、ドウモ甚深微妙の佛法ですから、初心のお方には隨分解し苦いであらうと思ひます、佛法の大海漸く入れば漸く深しで、以上の二句は深いといふても何だ淺いのですが、この第三句となつては、彌々その海底に到つて珊瑚の寶珠を得るのです、その海水も悉く汲み盡くさねばならんのであるから、非常なものです、雪竇禪師の頌に「一字七字三五字、萬像窮來不爲據、夜深月白下滄溟、捜得驪珠有多許」と云ふのがある、第一句は種々無量の法門一代藏經の文字言句のことである、第二句はその千差萬別の法門を廢捨して我が一心源に歸結することである、第三句はその一心源ありといへる分別も放下し去て本來無物の眞空に入ること、第四句は無一物の處亦無盡藏と無住の本より一切の法を建立し、花有り月有り樓臺有り、迷有り悟有り佛有り衆生有りといふ樣に如意寶珠を受用するところの宗乘を頌せられたものです、今この第三句の人俱兩俱奪の眞意は即ち「夜深け月白うして滄溟に下る」といふものですから、實に物凄い處へ御案内を致さなければならぬ、例へば善光寺の戒壇廻りの樣なもの隧道の眞ッ暗い處へ這入るのです、故に膽玉を潰さぬやう、氣を大丈夫に持つてお聞き下さらなくては、失望落膽の淵に沈むことが無いにも限りませぬ、何故かといふに諸君が是れまで汗水を垂らして心想の中に畫いて居たところの自佛や他佛の心念影像がスッカリと見えぬ樣になるからの事

ですされど函根峠や碓氷峠のトンネルを汽車に乘て通り抜ける樣なもので、頓てまた向ふの明るい處へ出るのですから、氣を慥かにさへ以て居れば決して膽を潰すやうな氣遣ひはありませぬ

今なほ一層卑近な譬喩を以てた話し致さうなれば斯うです、茲に一人の妙齡な美人があると假定致しませう、彼の美人が花見にでも出るとか、演劇見物にでも行くとか、若くは神社佛閣へでも參拜致さうとするには、手足や容顏の垢膩を洗ひ落し、而して髮飾りは申すに及ばず、紅粉白粉をペッタリと塗り附け、身に立派な衣裳を着け、その目指す處へ趣いて樂みを極むるのは即ち奪人不奪境の狀態であります、何故かといふに、その始めて發心するのは目指す處へ行かうと思ひ立つやうなもの、而して手足や面貌の垢膩を洗ひ落すのは、龕重の煩惱、即ち我見人見を脫する手段を講ずるのです、夫から又請求信順の念佛を唱へて極樂往生を願ふたり、題目眞言を唱へて未來成佛を求むるのは、スッカリと



支度が整うて、その道中を爲しつゝある樣なもの、夫から信心決定し歡喜踊躍の地に到つたのは、その美人が目指す處に趣いて愉快を感じて居る樣なものです、故に神社佛閣と云ひ劇場名所といふものは、成るべく衆人の目を惹く樣に立派に賑かに致してある、その如く極樂淨土の莊嚴や、佛菩薩の相好は、美を盡し善を盡して說いてある、されば奪人不奪境といひ心空境有といふのは釋迦如來が下根下劣の衆生を濟度せんがため、淨土他力の方便門を建立遊ばされたのであります

夫から又その美人が見物參拜等を終へ、自宅に歸り來ッて、瓔珞莊嚴の着飾り物を脫ぎ、紅粉白粉をも落し、平素の不斷着になつて、その坐處に落着いたのは第二句に於て辨じた奪境不奪人の狀態であります、之を歸家穩坐とも、萬法歸一とも、三界唯心萬法唯識ともいふもので有ます、又或はその美人が初めより物見遊山の心を起さず、家庭大事と心得、我家に在て神妙に働いて居るのは、正しく自力聖道の法門にて、飾りも何

にもない有りのまゝの修行ですゆゑ、紅粉を塗らず轉た風流と申すのです、さて其の美人の思ふには、見物に出掛けたり、參詣に出掛けたりすれば、身の着飾りもせにやならず、家業も怠り勝になる、身の着飾りを整へやうとするには色々と心配を致さねばならず、又懐中も淋しくなる、其れよりも自身の家業を大切に働いてさへ居れば、夫れが何よりの樂みであると自任して居る、之を自受用三昧の修行と申すのですから、坐禪儀の中にも「何ぞ自家の坐床を拋却して漫りに他國の塵境に去來せん」とて坐禪の當躰が其儘即心即佛、即心是佛であると信知せねばならぬと敎へてある、是れは境空心有の法門にて、廓庵禪師の設けられた「忘牛存人」といふ事になる、牛をば法に譬へ、人をば心（機といふ事もある）に喩へたものである

然るに今の人境俱奪は「人牛俱忘」とも「心境俱空」とも「人法二空」ともいふことになるのですから、一法を廢し一法を立つるといふ譯には行かぬ、例へば彼の美人が眞ッ裸になつて風呂に這入り、身躰をスッカリと沐浴して清淨潔白にする樣なものです、その通り今は佛法を眞ッ裸形にし、而も般若の智水を以て紅粉も白粉も薄垢も、颯波離と奇麗に摺流して仕舞はなければならぬ、何故かといふに彼の客觀の境に求むる所の他佛他土も（西方淨土の彌陀、東方瑠璃光世界の藥師、南方の無垢世界、北方の歡喜世界等の如きもの）主觀の境に證する所の自佛自土（自性の天眞佛常寂光土も）畢竟見來るときは能變の心識と、所變の境界とに過ぎぬ所のもので此の能變の識と所變の境とは、眞如なり佛陀なりといへど其實は唯識の所變にして一心の影像ぢや、ソコで楞嚴經第二の上卷に「五位百法は唯心の所現にして皆影像に同じ」とある、影像なれば固より眞物ではない、已に眞物でなければ、設ひ眞物に似て居れども、其實は虛妄分別である、何故かといふに、紅粉を附けたり、白粉を塗たり、立派な衣裳を着飾つたりしたのは、皆拵らへ物にて天眞爛漫の本躰ではない、

又その不斷着も脱いで仕舞はなければ其の本身が顯はれぬ樣なものです

されば〻ドウして其の自佛他佛自土地土が妄分別であるかといふに、其の能變の識(自佛)所變の境(他佛)といふものは、夢想と夢境との如きものにて、其實は邯鄲の夢枕ぢや、彼の盧生が夢中に燕國公に封せられたのは即心是佛なりと云つて喜んで居る樣なものです、亦往生極樂を喜んで居るのは夢中に黄金を拾ふたり牡丹餅を食ふたりして居る樣なものぢや

夢の世に夢にゆめみし夢人の夢物語りするも夢なり

といふ樣なもので、夢が醒めて見れば都て虚妄分別に過ぎないのです何故かといふに、自佛ぢやの他佛ぢやの往生ぢやの成佛ぢやのと騒いで居るのは金鎖玄路といふ所の法執分別といふものぢや、是れは菩提ぢや是れは涅槃ぢやと喜んで居るのは法愛といふ藥毒に中てられて



居るのです、其は又ドウいふ譯かといふに、釋尊が我執煩惱といふ心の病氣を治療せんが爲め、自力や他力の妙藥を調合あされた、その妙藥を服して我執煩惱の病毒だけは除いたけれど、法執法愛といふ藥毒が殘ッて、未だ無病健康の本身に復さないものぢやに依て、その藥毒を拔かんが爲め、否實有の妄見妄執を除かんが爲め諸法皆空といへる消毒方を敎へられたのがその般若部である、故に人境俱奪の一句(人法二空ともいふ)は下劑を見た樣なものぢや、下劑をかけて、その腹中に停滯せる佛見法見法執法慢の藥毒をスッカリと奇麗に洗ひ流して仕舞はなければ眞實無病の人とはなられませぬ、禪宗に於て悟後の修行を八釜敷申すのは、全くこの藥毒を除く手段であります、前に申した我執煩惱は鐵鎖のやうなもの、法執法慢は金鎖のやうなものです、鐵鎖を以て縛せらるゝのも自由が叶はぬけれど、金鎖を以て縛せらるゝも自由の利かぬことは同じである、鐵鎖はなほ外し易いけれど、金鎖は却て外し難い

古語に「金屑貴シト雖モ眼ニ入テ翳ト成ル」とある黄金の屑は、石砂や鐵屑とは違うて貴いものではあれど、夫が眼の中に這入て害を爲すことは小砂と同樣であります、故に「心中若し無事なることを得ば佛祖猶是れ寃家」なりと敎へたものです、金剛經に「法尙ほ捨つべし何に況や非法をや」と說かれた、又實際理地一塵を立せずと云ひ、佛の一字も心田の汚れになると拂ふのです

諸君マア能く考へて御覽じませ、世の中に於ても、上下貴賤を論せず、男女老少を問はず、何に就け彼に就けて、己れが自慢をするほど見苦い聞き苦いことはない、故に自慢自惚といふものは誠に人間の弱點である、その通り佛法を信ずる人でも左樣ぢや、自分の信じた宗旨を信ずる人でも左樣ぢや、自分の信じた宗旨を信ずる宗旨をば口を極めて惡くいふたり、ば非常に之を譽め、未だ信せざる宗旨をば口を極めて惡くいふたり、殊に宗旨喧嘩などに腹を立てたりなんぞするのは、我執煩惱の上にモウ一ツ法執法慢といふ病氣を加ふるのであるから、その執念といふものは一層甚しいのであります、ソコで小サな佛敎主義の會を設けても直に意見が衝突して軋轢したり、解散したりする樣なことになり易いものぢや、何んと耻かしい譯ではありませぬか

マア穿ッて申したならば、今の世に在る宗旨や、團体といふものは我法二執で固めて居ると申して宜からう、この我法二執を離れたならば、宗旨も團躰も殘らず解散して仕舞かも知れませぬ

併しながら、味噌の味噌臭きは上味噌に非ず、悟りの悟り臭きは上悟りに非ずといふこともありますから、佛法信者の信者臭きは上々の信者ではないといふことを記臆して置いて頂きたいのです、己れは少々佛法を研究した少々は坐禪をも爲た、安心をも授つたから、素人のお前方より己れの方が餘ッ程惠來ずといふ樣に、その物知顏を鼻先にブラサゲて他人を目下に視下したり、小馬鹿に爲たりする樣な料簡がなければよし、若しその料簡が自分に有りと氣が附いたなら

ば、そは矢張自分の心病であつたと心得て之を療治致さなければなりませぬ

斯様な譯で、言ふことは易いけれど、實際に此の亂麻稠林を伐拂ふには叢雲の寶劍、將た金剛王の寶劍を振はなくてはなりませぬ○金剛經に「凡そ所有ノ相ハ皆是レ虛妄ナリ、一切ノ相ヲ離レハ即チ諸佛ト名ク」とある、○中觀論に「未ダ曾テ一法トシテ因緣ヨリ生ゼザルコト有ラズ、是故ニ一切ノ法ハ是レ空ニアラザル者ナシ」とある、凡そ因緣より生ずる所の佛や淨土は皆幻法幻境といふものです、その幻といふは唯識所變の境ぢや、その幻境に於て佛を見たり、淨土を見たりするのは、夢想の境に入り夢物を認めて實有と思うて居る樣なものです、故に妄念妄執の夢を覺まして見るときは、幻佛も無くなり幻法も無くなる、○起信論に「一切ノ諸法ハ唯タ妄念ニ依テ差別有リ、若シ心念ヲ離レハ一切境界ノ相無シ」とある、又其次の文に「是故ニ一切ノ法ハ本ヨリ已來、言說ノ相ヲ離レ、名字ノ相ヲ離レ、心緣ノ相ヲ離レ、畢竟平等ニシテ變異有ルコトナク破壞スベカラズ、唯是レ一心ナリ故ニ眞如ト名ク、一切ノ言舌ハ假名ニシテ實無シ、但タ妄念ニ隨テ不可得ナリ、故ニ眞如ト言フモ亦相有ルコト無シ、乃至、一切ノ法ハ說ク可カラズ、念ズ可カラズ、故ニ名ケテ眞如ト爲ス」と、ある左すれば阿彌陀と說くも、藥師大日と說くも、十方淨土と說くも皆假名にして實無しぢや○金剛經に「一切有爲ノ法ハ夢幻泡影ノ如ク、露ノ如ク亦電ノ如シ」とある、さすれば佛身の三十二相八十種好といふも有爲の法あれば、諸佛の淨土諸祖の涅槃も亦夢幻泡影如露亦如電にして實法ではない

これを十牛の圖の歌で申さうならば斯うである

雲もなく月もかつらも木もかれて拂ひ果てたるうはの空かな

本よりも心の法はなきものを夢うつゝとはおにをいひけん

といふので、人も無ければ境もない、趙州禪師が、一僧の辭退し去る時間

うて申さるゝに「汝は、何れの處にか去る」そと仰せられたれば、其僧が答へて「諸方に佛法を學し去る」と申した、すると禪師が拂子を竪てゝ申されけるに「有佛の處に住することを得ざれ、無佛の處急に走過せよ」と示されたことがある、之を超凡越聖といふのである、有佛の聖境にも住まらず、無佛の凡地には勿論足を住めてはならぬとのことです

○昔し牛頭山の法融禪師が山中の巖窟に棲で坐禪をして居られた時には、百鳥が日日花を啣み來ッて御供養を申し、天人も天食を運んで御供養を申し上げた、然るに四祖の道信禪師に逢ふて心境俱空、人境俱奪の旨を領じられてからといふものは、百鳥も來らず、天人も天食を送らぬ樣になつたといふ事ぢや、その故はドウしたことかと云ふに、四祖大師に逢はぬ以前は隨分結構な境界ではあつたけれど、まだ天人や百鳥のために其の居處を窺はれた丈が境界が低くかつたのである、然るに四祖に逢はれて後はッきと其の境界が高くなつたから、モウ渠等が窺ふことが出來なかつたのである、天人や百鳥のみではなく、設ひ佛魔鬼神たりとも、心境俱空の消息をば窺ふことが出來ぬ、斯ういふ境界の人でなくては、迚も鬼神妖怪を退治する業は叶はぬ、之を非思量の境界と申すのである、白隱和尚が隻手の音を聞けよといふ公案を授けられたのは、此邊の消息である、昔し南泉和尚が猫を斬られたのも、趙州和尚が狗子に佛性無しと答へられたのも亦此邊の消息である、馬祖禪師が或時即心即佛と唱へられたのは、奪境不奪人の義を示されたのであるが多くの人がその即心即佛といふを珍重して止まぬから、その法執を奪ひ取らんがため、後に非心非佛と示された、それは人境俱奪の宗旨を示されたので、之を佛向上の事とも、向上の一竅とも、空王那畔の最大事とも申すのです、大智禪師の偈に(玄路)

空王那畔絶知音。消息分明無處尋。黄閣簾垂人不侍。紫羅帳外月沈々

とある、是は了了の時了ずべきなく、玄玄玄の處更に訶すべしといふ玄の又玄了の又了といふ玄眞の玄といふ深奥である、此處に到てはモウ佛見も法見も及ばぬ處である、洞山大師が「佛祖を透り得ずんば佛祖に慢じ去らる」と云はれ、臨濟大師が「爾若し佛を求めは即ち佛魔に攝せられん、爾若し祖を求めは即ち祖魔に縛せられん、爾若し求むること有れば皆苦なり、如かじ無事ならんには」と云はれ、三祖大師が「夢幻空華何ぞ把捉に勞せん、得失是非一時に放却せよ」と云はれたのも、臨濟大師が「佛に逢うては佛を殺し、祖に逢うては祖を殺し、羅漢に逢うては羅漢を殺し、父母に逢うては父母を殺し、親眷に逢うては親眷を殺して、初めて解脱を得ん、物の與めに拘せられず、透脱自在なり」と云はれた、是等は何れも皆金剛王の寶劍を振ッて、各人心内の亂麻葛藤を截斷せられたのです

斯樣に先づ我が心内に向ッて菩提涅槃眞如佛性佛如來祖師羅漢等の幻影幻像を殺し盡したから、内外玲瓏として本來無一物の大虛空界となつた、この大虛空界が諸佛衆生の本源、天地万像の太元である大智禪師がこの大虛を偶に作られた

曠大劫來空索索。了無相貌與人親。四維上下不容髮。日炙風吹十二時。

高而無上廣無涯。天地如何覆載伊。徧界不藏空索索。從他日炙與風吹。

これを講釋すれば餘り長談議になるから、今はお預りにして、只參考の爲めに御覽に入れたまでの事です、併しながら天地如何ぞ伊を覆載せんとある、伊とは何であるか、天も覆こと能はず、地も載ること能はざる所の伊は何物であるぞと、心意識の運轉を停め、念想觀の測量を止めて如何と工夫し去るときは、默識心通する時節がありさうなものですドウも此の心境俱空、人境兩俱奪の所は釋尊も十四年の間かゝつてお

説にあつたのですから、勿々以て一朝夕に説破することは出來かねますが、マア以上の辨解で少しお分りにあつたらうと思ひます

時に一僧が臨濟大師に向ひ、如何か是れ人境兩俱奪と問ふたれば、大師が『并汾絶信獨處一方』と答へられた。

これは如何あることかといふに、并汾とは唐朝の州名である、その并州と汾州とは仲違ひをして一方に獨處し、並らんで居ながら互ひに音信を杜絶した事がある、その故事を引かれたのです、而して又この二州の城廓は高く大空に聳えて、人の容易に攻め入ることの出來ぬ處であつたといふ事ぢや、これは全身獨立ス空劫ノ前といふが如く、一切の對待を絶したところの、謂ゆる『萬象之中獨露身』です、永嘉大師が『心ハ是レ根法ハ是レ塵、兩種猶鏡上ノ痕ノ如シ、痕垢盡キ除イテ光リ始メテ現ハル心法雙ベ亡ジテ性則チ眞ナリ』と行はれた絶對無二なる唯我獨尊の境界を一句に答へられたのです、佛法修行も此處まで漕ぎ着けぬくては行いては到る水の極まる處とは申されませぬ

諸君、猶ほ一言申し置き度いことがある『佛魔同相を現ずる時作麼生か是れ邪正を辨せん』といふ問題がある、諸君は此の時ドウして其の邪正を辨別致しますか、若し辨別しなければ天魔の爲めに其の肺肝を窺はれます私ならば斯樣に答へます、佛魔俱に打殺すと、即ち佛來も三十棒、魔來も亦三十棒ぢや、何故かといふに、心中の佛魔すら一刀兩段に殺盡するのですから、眼界に現はるゝものは固より妖怪の所業に相違はありませぬ○昔し蜷川新右衛門の臨終の時、空中に三尊の彌陀が現はれたとある、スルと何れも御來迎があつたとて、念佛を唱へるやら、禮拜をするやら大騒ぎをする、然るに蜷川は豫て一休禪師に參じた人ですから、チャンと妖怪の徒らぢやといふことを知り、その枕邊にあつた弓を取り彌陀の眞正面を目掛けて箭を射られたれば、何にがな多きな古狸がバッタリと落ちて其の光明が消ねたといふ事です、流石は蜷川ぢ

や、又支那の五臺山には文殊大士が居らるゝといふ、是れは如何にも事實らしい話しぢや、折節老翁にあつて現はれたり、童子になつて現はれたりしたといふ事です、或時無著禪師といふが、お粥を炊いて居られた所がその粥の湯氣の上に文殊大士が端嚴微妙の姿を現はされた、スルと禪師がイキナリ掷り附け、釋迦老子來るも我亦打たんと云はれれば文殊がボッと消えたといふ話しがある、これは化物ではあくて、文殊大士が無著の境界を試さんがために現はれたものと見える、否、文殊の化物であつた、けれど無著の吹毛劍には如何に文殊でも退身三歩ぢや斯う云ふ般若の大智劍を磨いて居かければ、佛魔祖魔菩提魔涅槃魔等の諸魔に馬鹿されます、又同案禪師の寶劍がある

萬法泯時全體現。三乘分處假安名。丈夫自有冲天志。莫向如來行處行。

これが即ち超佛越祖の見識であります、又眞覺大師の語に「了了トシテ見ルニ一物モ無シ、亦入モ無ク亦佛モ無シ大千沙界海中ノ漚、一切ノ賢聖ハ電ノ拂フガ如シ」とある、之が即ち熱鐵上に寸塵を立せず、大火聚の如く文彩に著はせば即ち染汚に屬すといふ人境俱奪の正當ぢや

## 第四　人境俱不奪

さて段々お話し申した通り、第一句は人奪、第二句は境奪、第三句は人境奪にて、何れも奪の字があつたのですが、今ごの第四句は人境不奪であるから、先づ奪の字が無くなつたのであります、奪は取の義で奪ひ取るのですから、空無の義にもなり、除滅の義にもなる、然らは何を奪ひ取るのであるか、何を空無にし除滅するのであるかといふに、佛法は元來應病與藥の法門でありまして、佛祖は醫師の如きもので、法門は良藥の如きものであります、社會の人身に疾病があればこそ醫師も良藥も必要なるが如く、衆生の心内に疾病があるから、佛祖も法門も必要なのであります、さて其の衆生の心病とは何んなものであるかといふに、そは執

著の心であります凡そ身躰の疾病は四大(地水火風の外四大と堅濕煖動の内四大の)不調即ちその増減より起るといふことである、四大に増減がなく程能く調和してさへ居れば疾病は起らぬといふことです心もその通り執著の念だに起らぬば圓融無礙で迷ひもなければ悟りもない、然るに人の心は死物でない活物であるから、兎角執著の疾病を起して居らぬ

無住法師の仰せに「無始の輪廻は一心の執心より起りて生死の牢獄破れがたし、一代の諸教方便の門廣けれども、只衆生の執心を除きて無我の理に入るゝの外所詮なし」とある如く、釋尊御出世の本懐は、衆生の執心病を除滅し空無にして、無我清淨の理に誘引せらるゝより外に用事はないので祖師先徳の御苦勞も亦只之が爲めです、三乘十二分教五千四十餘卷、八萬四千無量の法門といへば、如何にも吃驚するやうなれど、之を推約めて見れば、執心の我見を除いて清淨無我の本心に歸入するまでの事です、複雜といへば複雜のやうなれど其實は至極單純なものぢや、故に六ケ敷いといへば限りもなき六ケ敷いものであるが、一言にして佛法の大意を盡すといふときは前に申した通りの事であるから、學者でなくては佛法が學べないといふ譯ばない、何んなに無學文盲の人でも優に佛法を會することが出來る、只會するのみではなく、之を行することが出來ます

併しながら佛法の理論を覺えるは、學問思想のない人では行かぬ、理論を覺えても之を實地に行うて然我清淨の境界にならなければ、何の所詮もありませぬ、故に佛道に入るは上智と下愚とを論せず、利人と鈍者とを問ひませぬ、上智の人には上智相應の執心があり、下愚の人には下愚相應の執著がある、その執著病を除くが爲に、如來一音の法藥を盛分けたのが此の四料揀であります、故にこの四料揀は誰にも彼れも入用といふ譯では御座りませぬ、第一句の奪人が適藥とする人もあれば、第

二句の境奪が適藥となり、第三句の人境奪が適藥となる人もあり、第四句の人境不奪が適藥となる人もあります、ソコで臨濟大師が有時は〳〵と申された、何故かといふに下根の人は專ら我身に執著する病があるから、その人我見を除滅せんが爲に奪人不奪境の藥を與へねばならぬ、中根の人は我所と謂つて其境に執著する病があるから、その我所といへる法我見を剝奪せんが爲に奪境不奪人の藥を與へねばならぬ、又上根の人は微細の人我と微細の法我とに執著する病があるものぢやに依て、之を療するには人境俱奪の劇劑を與へなくてはならぬ、この微細の人我法我は人心に於ける慢性病で、之を根治するには餘程骨が折れる、その骨の折れる次第は前句に長々とた話し申した通りであります已に人我も無く法我も無ければ、人法二空の本來無物に入る、この無物の處は萬法の根由あるがゆゑ、佛法では之を正位とも無爲寂靜とも申すのです、前に夫れ「了了トシテ見ルニ一物モ無シ、亦人モ無ク亦佛(法)モ無シ、大千沙界海中ノ漚、一切ノ賢聖ハ電ノ拂フガ如シ」と眞覺大師の語を引いてお話し申したのであります、その無人といふのを小乘では諸法無我と說き、その無佛といふのを大乘では諸法皆空と說くのであります、然るに無我と說けば佛の眞意を領するの腦力に乏しきがため直に此の個人までが斷滅することのやうに誤解して斷見に陷り、皆空と說けば佛の眞意を解するの智力に乏しきがため、天地万物の原理原則として動かすべからざる所の因果までが滅無することのやうに誤解して空見に墮つる、この斷空病は多く上々根智の人にある、この斷空病を根治せんが爲に人境俱不奪といへる妙藥を與へなくてはならぬ必要があるのです、この斷空病は實に膏肓必死の病ともいふべきものにて、少々學問の伎能あり智識の腦力あるものを害することは甚しいものです

諸君、私は前句を辨解するの初めに美人の譬喩を以てしました、即ち

人境俱奪は眞ッ裸になつて洗湯に這入るやうなものぢやと申した筈です、その洗湯に沐浴するのは、何の爲であるかといへは申すまでもなく、根本的に身体の垢膩を洗ひ除かんが爲です、根本的に身体を清潔にせんが爲です今もその如く無我と說き皆空と說くのは心識上の垢膩を洗却し去らんが爲です、爲るに若し諸法無我とあるから、我れ〳〵人類は今生のみにて此の個人が無くなるものと思ひ、皆空であるから、神佛も無く因果も無きものなりと思はゞ其は身体の垢膩を除却せんとして、還てその身体までも熱湯の爲に煮殺すやうなものです、草津の湯は身体の病毒を根治するに最も適切といふことぢや、殊に熱の湯に入れば其の体毒がスッカリと体外へ吹出して無病健全に復するといふ事ぢや、されど若し其度を誤まり其量を過したからば、大切なる此の身体までを殺して仕舞はなければならぬやうになる、佛敎の無我皆空は草津の熱湯である、之に浴するのは根本無明の病毒を療治するが爲で



ある、微細の我法二執を除却せんが爲である、然るにその無我皆空に執著して其度を誤まり其量を過すときは、あはれ救ふべからざる斷空病となつて、受け難き最勝の人身を徒らにし、値ひ難き無上の佛法に値ひながら、佛法の功德を得ずして空しく三途の故郷に歸らねばならぬ、譬へは寶山に登り寶海に入て空しく金玉を得ざるが如きものであります、法眼禪師の謂ゆる

爭鬪を用ひて神通と爲し、唇舌を騁せて三昧と爲し、是非鋒のごとくに起つて人我山のごとくに高し、忿怒は即ち是れ修羅、見解は終に外道と成る、儻し良友に遇はすんば迷津を拔く可きこと難し、是れ善因と雖も而も惡果を招く

とは法執法愛に病める附佛法の外道を警誡せられたのであります、ソコで夫れ人法二執の病根垢膩の除き去たならは、何時までも裸躰では居られぬから、空即是色、眞空妙有、諸法實相の衣服を纏はなくてはなら

ぬ、如何に美人で身躰の病根垢膩が去たからとて、脱白露現と裸躰の丸出しでは甚だ見醜い、上は王公貴人より、下は匹夫卑賤に至るまで、赤裸々にあつて洗湯に這入た時には、敢て貴賤尊卑の差別は見えぬけれど、衣服を着けて見れば夫々貧富高下の差別がある、今もその如く平等無差別の眞如界に入るときは、否な無物の正位に入るときは、衆生諸佛迷悟凡聖の差別はあけれど、その正位より身を偏位(正位は空界無物偏位は色界萬象)に轉じて見るときは、否な眞如界より生滅界に振り去け見るときは、衆生は依然として衆生の位に在り、諸佛は依然として諸佛の位に在りて、凡夫は凡夫、聖人は聖人の位に在て、毫末許りも其の當相が混亂して居りませぬ

人境俱奪といふときは眞如平等であるから、無佛無法無人無衆生と說きます、然るに是れは眞理の裏面(譬へは鏡背の如きもの)にして、人境不奪といふときは、萬法差別の當相であるから、是れは眞理の表面(譬へは鏡面の如きもの)でありますその表面より見るときは有佛有法有人有衆生である、更に換語せば、人境俱奪は眞空にして、人境不奪は妙有である眞空の當躰よりは無因無果と談することもあれど、妙有の當相より正しく因果歷然と談ずるのであります、そは何故であるかといふに、眞如の本躰は常住不變にして生滅增減がないからの事です、又その眞如が自性を守らず隨緣して有爲轉變の生滅增減を現するからの事です、されば長へに常住にして、長へに無常あるは、恰も大海に於ける水波の如きもので、水を離れて波の有る道理もなく、波を離れて水の有る道理もない、空といふは海水の清淨あるが如きものにて、有といふは清淨なる海水の風動に依て活波瀾を起すが如きものである、如何に本來空と悟りても、此の五尺の身躰が無くなるものでもなければ、山河大地が破裂するものでもない、有を究竟して見るときは空となり、空を究竟して見るときは有となる、故に偏位の色界を究竟するときは正位の空界

となり、正位の空界を究竟するときは偏位の色界となる、之を有中の空空中の有と申すのです、

斯の通り眞理といふものは、有の一邊に片付けることも出來ぬものです、然るに凡夫は有相に執著して一邊に片付けることも出來ぬものです、二乘外道は空相に執著して人我見と法我見とを起して己が精神病を造り、凡夫として別人ではなして空見と斷見との精神病に惱んで居るのです、

い下根下劣の人の事ぢや、二乘外道として昔しの人の事ではない、今の中上根の人の事である、この凡夫二乘は人の心の階級であるから、三千年前も三千年後も變ッた事はない、有形の事物(身躰及びその身躰に網羅する色聲香味觸)に執著する者が凡夫にして、無形の眞理(一心の躰相用)に執著する者が二乘外道である、この空理に執著する者は、因果を撥無して無間の罪業を造ります、佛在世の時、善星比丘といふは、利口發明にして十二部教(一切經のこと)をも諳誦して居た程の人でありましたけ



れども、妄りに一切法空を說いて、因果を撥無したものぢやに依て、生ながら無間地獄に墮落したといふ事です、又百丈山の昔しの(過去迦葉佛の時)百丈和尙は不落因果の空見に執著したが爲に、五百生の間、野狐の身を受けたといふ事ぢや、是れはまあ昔し話しであるから、半信半疑の間に彷徨する人もありませうけれど、今日でも此の空見に墮する者は、佛あることを信ぜず、神あることを信じませぬ、有ることを信じませぬから神佛のことを疎略に致します、疎略にするのみならず、自から傲慢不遜にして、假初にも其の心底から神佛の前に於て禮拜供養する樣な心が起りませぬ、啻に自から禮拜供養せざるのみならず、其の之を信仰し、其の之を禮拜する者を目するに、迷信とか妄信とかいへる冷語を以て、之を嘲罵し之を誹謗致します、而して自立獨尊とか、唯我獨尊とか如何にも己れほど惠來い者はないやうなことをいふたり思ふたりして居る所の生意氣學者が澤山にあります、而して又斷見に墮する者ぢや

に依て、前身後身身身相續して種々に變幻(六道に輪廻し四聖に往來すること)することを信じませぬ、故に因果を味まして、身最負身勝手の惡業を造ります、火は熱きもの、毒は身を害するものといふことを徹底信知したならば、ドウ有ても火を攫むことも出來ねば、毒を服することも出來ませぬ、若しその火を攫み毒を服する者がありとすれば、それは決して正氣の沙汰ではありませぬ、狂愚の最も甚しきものです、其の如く惡因は必ず惡果を結ぶ者なりといふことを徹底信知したならば、ドウ有ても其の惡業が作られる者ではありませぬ、この善惡因果の關係を今生と來生とにかけて見るときは、遠くは分り兼ぬるやうなれど、活眼を開いて見るときは寶に瞬目の間にあるので、夫が遠いから分らぬといふは凡見の甚しきである、分らぬといへは明日のことも分らぬ、分るとするときは盡未來際のことも分る、斯樣あわけで、無學文盲の者が却て神佛あることを信じ、因果の味ますべからざることを信じて居ります

から、知らず識らず眞理に合うて居ります眞覺大師の證道歌に

豁達の空は因果を撥ふ、莽莽蕩蕩として殃禍を招く、有を棄て空に著く病亦然り、還て溺を避けて火に投ずるが如し、妄心を捨て眞理を取る、取捨の心巧僞と成る、學人了せずして修行を用ふ、眞に賊を認めて將て子と爲ることを成す

とある、人境俱奪に執著して、人法二空に坐着するは豁達の空にして因果を撥無するので、譬へば水を出て亦火に飛び込むやうなもので、其身を害し、其理を味ますことは同じことです、最前から申す通り、人境俱奪諸法皆空は草津の熱湯で、有相執著の病を療するが爲には、暫時其處に身心を投込まねばならぬけれど、多少心地が善いからとて、長く其處に居るときは、惜い哉遂に佛種子を斷絶して仕舞はねばならぬやうになる、この沈空滯着を敗種の衆生と擯斥するのです、禪宗ではこの人境俱奪の昏沈に墮するのを有氣息の死人とか、向上獨宿の死漢とか申して

非常に之を嫌ひます、佛は諸法實相と説かせられて、法は法位に住して世間の相は常住なりと仰せられた、何でも一たび大虚空のトンネルを越し拔け大死一番大活現成の境界にならなくては、諸法實相の眞面目が分りませぬ、已に法が法位に住するのであつて見れば、天は高きに位して、万物を覆ひ、地は低きに位して萬物を載せて居る如く、天子は上に在て萬民を撫育して居られ萬民は下に在て天子を奉戴し、佛陀は無上正覺の位に在しまして、其の光明裏に一切衆生を攝取せられ、衆生は信解行證の位に在りて佛陀を尊信して居る、之が即ち世間相常住である實際理地には一塵を立せざれども、佛事門中には一法を捨てざるのが人境俱不奪である、放下するときは悉皆之を放下して一微塵をも殘さぬが宜し、把住するときは悉皆之を把住して、一微塵許りの法をも捨てぬやうにするが宜い、古語に放下するや眞金色を失し、把住するや瓦礫光を生ず」といふ事がある、放下するときは菩提涅槃眞如佛性までも放下するのが破情諦にして、把住するときは生死煩惱凡夫衆生までが悉く宇宙の眞實相なりとするのが即ち建立門の消息であります

○維摩經に「若し無爲を見て正位(空界)に入る者は復た阿耨多羅三藐三菩提の心を發すること能はず、譬へば高原陸地に蓮華を生せず、卑濕淤泥に乃ち此華を生ずるが如し、是の如く無爲の法を見て正位に入る者は、終に復た佛法を生ずること能はず、煩惱の泥中に乃ち衆生の佛法を起す有るのみ、又種を空に殖れは終に生ずることを得ず、糞壤の地に乃ち能く滋茂するが如し、是の如く無爲の正位に入る者は佛法を生ぜず、我見を起すこと須彌山の如くなれば、猶能く阿耨多羅三藐三菩提の心を發して佛法を生ず、是故に當に知るべし、一切の煩惱を如來の種と爲すことを、譬へは巨海に下らざれば終に無價の寶珠を得ること能はざるが如し、是の如く煩惱の大海に入らざれば、則ち一切の智寶を得る能はず

と、斯様に夫れ涅槃の無爲にも住せず、生死の有爲にも着せずして此の世間に處するのが即ち菩薩の心行といふものです、無爲の正位といふは人境俱奪の處、煩惱が即ち菩提にして、生死が即ち涅槃であると躰達するのが、人境俱不奪にて、一は向上、一は向下である、淨土門に於ては彼の空に入るのを往生と云ひ、有に出づるのを還相と談するので、一は身心脫落にて、一は脫落身心である、彼の往相回向の時は多少の法執法愛もあれど還相回向の時は、人執も無ければ法執もない、脫落身心の時は洒々落々にして、佛見法見の臭味は微塵許りもありませぬ、故に悟り了れは未悟に同じと申してある、道元禪師が支那より佛法を正傳して歸朝せられし時、

空手にして鄕に還る、毫も佛法無し、唯だ眼横鼻直なることを認得す、

日は朝々東より出で、月は夜々西に沈む、鷄は五更に向て鳴き、三年一たひ閨に逢ふ

と云はれたのは、人境其儘諸法實相にして少しも取捨するには及ばぬとの義であります、一休禪師の歌に〇我が心そのまゝほとけいき佛、波を離れて水のあらばやゝ躰ありて凡夫こゝろのおかりせは本來空の無相眞佛〇物事に執着せざる心こそ無相無心の無住ありけり」ともあつて、何でも執著の心さへなければ、夫が即ち安樂淨土の住居である、然かのみならず、已れあることを忘れて衆生の爲に大慈悲心に住するのが菩薩の心である、その菩薩の心を大智禪師が偈に作られた(廊はイチグラと訓す)

口似醉人心似月。回途垂手入廊時。無明山上大法炬。煩惱海中船筏師。孤峰頂上不曾住。古渡頭邊拽水泥。一極悲心徹三世。甘堪苦海作船師。

何うも此偈を吟じて見るときは實に心が愉快に勇ましくおるやうです

さて或僧が臨濟大師に向ひ、如何にあらんか是れ人境俱不奪と問ふたれば、大師が「王寶殿に登れば野老謳謌す」と答へられた

是れは如何なる意味であるかといふに、一國の大王が九重門内の大寶殿に登りたまひて天下の政治を遊ばす時には、田夫野翁までが、太平無事の君が代を謳ふが如く、大覺法皇の佛世尊が極樂淨土に在しまして、衆生濟度の大法座に登りたまへば、一切衆生がその教化を蒙むりて各〻佛德を讃歎し奉つるとの事ぢや、これは道元禪師が「諸法の佛法なる時節、すなはち迷悟あり、修行あり、生あり死あり、諸佛あり衆生あり」と申されたのと同じことで、佛は佛の位に住し、衆生は衆生の位に在りて、世間相常住であるとのことを示されたものです、して見ると佛陀は究竟圓滿の大聖人にして、我等は一分の信心を獲得し、一分の修證を認得したる得定の凡夫なりと知りて益々修行を怠らぬやうに致さなくてはならぬ、これが即ち悟後の修行、證上の修といふものです

餘り長談議になつて、臨濟大師の宗乘を失うたかも知れませぬが、要するにこの四料揀は、修行の順序階級を論評せられたものと窺はれます、佛の一代藏經も亦この四句を以て料揀せられ、一千七百則の公案も亦この四句を以て料理揀辨することが出來ます、ソコで拙者は初めにこの四料揀は佛海の磁石であると申しました通り、この四句に依て佛法を料理するときは、大抵その方針が分るであらうと思はれます、渺たる佛海のことは兎に角、我が心海の方針を確定することが出來るのであります、成る可く通俗を旨とした積りではありましたけれど、今まで佛學を研究したことのないお方には何分解りかぬる所が嘸多かつたであります、モウ此上に辨解を附するときは、末に走つて本を忘れるやうになりますから、先づは此んなことにして、今夕はお分れに致しませう

臨濟大師示シテ云ク道流爾如法ノ見解ヲ得ント欲セバ但人ノ惑ヲ受クルコト莫レ裏ニ向ヒ外ニ向テ逢著セバ便チ殺セ佛ニ逢テハ佛ヲ殺シ祖ニ逢テハ祖ヲ殺シ羅漢ニ逢テハ羅漢ヲ殺シ父母ニ逢テハ父母ヲ殺シ親眷ニ逢テハ親眷ヲ殺シテ始テ解脫ヲ得ン物ノ與ニ拘セラレズ透脫自在ナリ



四料揀講話（畢）

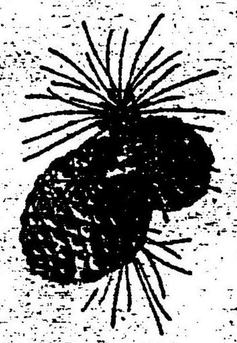
明治三十五年九月二日印刷
明治三十五年九月十三日發行　定價金十錢

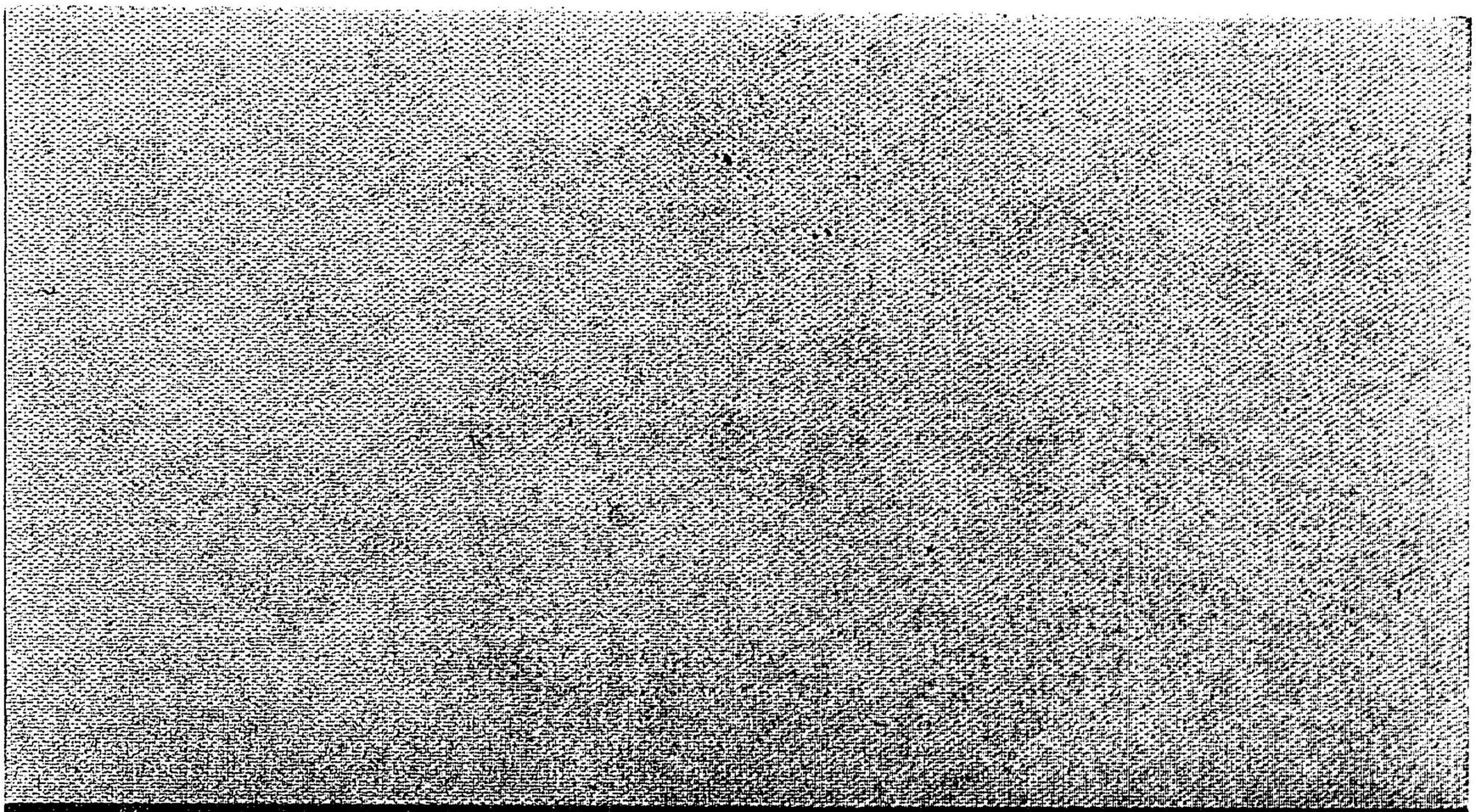
編輯者　齋藤道痴
東京芝區愛宕町二丁目十六番地
發行兼印刷者　桐村覺豐
東京芝區愛宕町一丁目十六番地
印刷所　正文舍
東京芝區愛宕町一丁目十六番地
發行所　通俗佛教館

不許複製

318
50

IF3F-67





318
50

019871-000-6

318-50

唯心禅話

原僧運／述

M35. 9
ABG-0703